
嵐山町

古里古墳群清水支群

嵐山郷獨身宿舎B3棟改修工事

(嵐山郷遺跡埋蔵文化財発掘調査整理等作業

及び発掘調査報告書刊行業務委託)

埋蔵文化財発掘調査報告

2022

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

このたびの「古里古墳群清水支群」に係る発掘調査報告書の刊行にあたりまして、御尽力賜りました関係の皆様方に深く感謝を申し上げます。

さて、埼玉県立嵐山郷は、重度知的障害や心身障害のある方が利用される、県の福祉を支える重要な社会福祉施設であり、当該独身宿舎の安全性向上や施設の延命化のため、改修工事が計画されました。

一方、当該工事に係る事業予定地とその周辺は、50基を超える古墳から構成される「古里古墳群」を擁する埋蔵文化財包蔵地として、以前からその存在が知られています。

こうしたことから、県教育委員会が文化財保護法に基づき、関係者と慎重に協議を重ねた結果、事業実施にあたっては、発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとなりました。

そこで当事業団が埼玉県から委託を受け、事業予定地の発掘調査を行い、その記録を報告書として、今般刊行することとなりました。

発掘調査の結果、古墳時代の溝跡や土壌などが発見され、溝跡からは古墳時代後期の土師器の甕や壺が出土し、古里古墳群の実態や地域の歴史を明らかにするうえで、貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、御尽力いただきました埼玉県福祉部社会福祉課、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、嵐山町教育委員会、地元関係者等の皆様に重ねて御礼申し上げます。

令和4年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 依 田 英 樹

例　言

- 1 本書は埼玉県比企郡嵐山町古里地内に所在する、古里古墳群清水支群第1次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

古里古墳群清水支群（No36-109）
第1次調査
埼玉県比企郡嵐山町古里1848-1
平成30年10月3日付け教文資第2-29号
- 3 発掘調査は、嵐山郷独身宿舎B3棟改修工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 事業の委託事業名は下記のとおりである。

発掘調査事業（平成30年度）
「嵐山郷独身宿舎B棟改修工事（嵐山郷遺跡埋蔵文化財発掘調査委託）」
報告書作成事業（令和3年度）
「嵐山郷独身宿舎B棟改修工事（嵐山郷遺跡埋蔵文化財発掘調査整理等作業及び発掘調査報告書刊行業務委託）」
- 5 発掘調査・報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。発掘調査期間と担当者は以下のとおりである。

発掘調査は第1次調査を平成30年10月24日か

ら平成30年12月31日まで、上野真由美・赤熊浩一が担当した。報告書作成事業は令和3年11月1日から令和3年12月31日まで、富田和夫が担当した。

報告書は令和4年2月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第472集として、印刷・刊行した。

- 6 発掘調査における基準点測量は、株式会社未央測地設計に委託した。
- 7 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は富田が行った。
- 9 出土品の整理・図版作成は主に富田が行い、遺物は金子直行・村山卓・水村雄功の協力を得た。
- 10 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、IV-2（1）を金子、その他を富田が行った。
- 11 本書の編集は、富田が行った。
- 12 本書にかかる諸資料は、令和4年3月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
- 13 発掘調査・報告書刊行にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

嵐山町教育委員会 熊谷市教育委員会
新井 端 井上尚明 村上伸二

凡 例

- 1 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ}00'$ 00"、東経 $139^{\circ}50'00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示している。

C-3グリッド杭の座標はX=11900.000m、Y=-47620.000m、北緯 $36^{\circ}06'21.9211''$ 東経 $139^{\circ}18'15.9227''$ である。
- 2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく 10×10 mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
- 3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばC-3グリッドと呼称した。
- 4 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

SD…溝跡 SK…土壤
P…ピット
- 5 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を踏襲した。
- 6 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図 1:120
基本層序 1:60
溝跡・土壤・ピット 1:60
縄文土器 1:3
土師器・須恵器 1:4
- 7 遺構図・遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。

 地山
・須恵器は断面を黒塗りで示した。
- 8 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。
- 9 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・大きさはcm・重さはg単位である。
・（ ）内は推定値、〔 〕は残存値を示す。
・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石
E：石英 F：軽石 G：砂粒子
H：赤色粒子 I：白色粒子
J：白色針状物質 K：黒色粒子
L：その他 M：チャート
N：雲母状微粒子
・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。
・色調は『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。
・備考には注記No.・煤の付着・推定生産地・文様の特徴等を示した。
- 10 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図、嵐山町・熊谷市・深谷市発行の1/2,500都市計画基本図を編集の上使用した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	I 古墳時代から古代の遺構と遺物	14
1 発掘調査に至る経過	1	(1) 溝跡	14
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	(2) 土壙	18
3 発掘調査・報告書作成の組織	2	(3) ピット	21
II 遺跡の立地と環境	3	(4) グリッド出土遺物	22
1 地理的環境	3	2 その他の遺物	22
2 歴史的環境	4	(1) 縄文時代の遺物	22
III 遺跡の概要	9	(2) 近世以降の遺物	24
1 古墳群の概要	9	V 調査のまとめ	28
2 調査区の概要	12	1 第1号溝跡の時期について	28
IV 遺構と遺物	14	2 第1号溝跡の性格について	30

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第10図 第2号溝跡	19
第2図 周辺の遺跡	6	第11図 土壙	20
第3図 古里古墳群古墳分布図（1）	10	第12図 ピット	21
第4図 古里古墳群古墳分布図（2）	11	第13図 ピット・グリッド出土遺物	22
第5図 基本土層図	12	第14図 縄文時代の出土遺物（土器）	23
第6図 全体図	13	第15図 縄文時代の出土遺物（石器）	24
第7図 第1号溝跡	15	第16図 近世以降の出土遺物（1）	26
第8図 第1号溝跡遺物出土状況	16	第17図 近世以降の出土遺物（2）	27
第9図 第1号溝跡出土遺物	17	第18図 参考資料	29

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	7	第4表 ピット・グリッド出土遺物観察表	22
第2表 第1号溝跡出土遺物観察表	18	第5表 出土石器観察表	23
第3表 ピット一覧表	22	第6表 近世以降出土遺物観察表	25

写真図版目次

図版1	1 調査区全景（南から）	4 第3・4号土壤
	2 調査区全景（東から）	5 第5号土壤
図版2	1 第1号溝跡（南から）	6 第6号土壤
	2 第1号溝跡（北から）	7 第7号土壤
	3 第1号溝跡北西土層断面	8 トレンチ5北側土層断面
	4 第1号溝跡C-C'土層断面	図版4 1~4 第1号溝跡出土遺物
	5 第1号溝跡遺物出土状況（1）	図版5 1~3 第1号溝跡出土遺物
	6 第1号溝跡遺物出土状況（2）	4 縄文時代の石器（1）
	7 第1号溝跡遺物出土状況（3）	5 縄文土器
	8 第1号溝跡焼土塊	6 縄文時代の石器（2）
図版3	1 第2号溝跡	7・8 近世以降
	2 第1号土壤	図版6 1~13 近世以降
	3 第2号土壤	

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県福祉部社会福祉課では、嵐山町の嵐山郷における宿舎棟について、内部改修、外部改修、外構工事等を含む改修工事を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前から関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

嵐山郷独身宿舎B3棟改修工事に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、福祉部社会福祉課長から平成29年12月22日付け社福第1939号で、埼玉県教育委員会教育長宛て埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

当該箇所については、平成30年1月15日に確認調査を実施し、古墳時代以降の溝跡、平安時代以降の土坑が現存することが確認された。埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成30年1月18日付け教生文第2105-1号で、社会福祉課長宛て記録保存のための発掘調査が必要である旨を回答した。その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、発掘調査の措置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、福祉部社会福祉課、文化資源課の三者で、調査範囲、期間などについて連絡調整を行い、平成30年5月23日付け教文資第382-1号で、埋蔵文化財保護に関する事前協議が整った旨を通知した。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対する、同条第4項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

平成30年1月29日付け教生文第5-1625号

文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

平成30年10月3日付け教文資第2-29号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

古里古墳群清水支群の発掘調査は、嵐山郷独身宿舎B3棟改修工事に先立ち、平成30年10月24日から平成30年12月31日まで実施した。調査面積は264m²である。平成30年10月1日に埋蔵文化財発掘調査届を嵐山町教育委員会に提出し、事務手続きを行った。

10月24日調査区内の樹木伐採に着手し、11月6日器材搬入、11月7日開柵設置、11月8日に敷設板を敷設した。11月12日重機による表土掘削作業と補助員による遺構確認作業を始めた。11月13日基準点測量と測量杭の打設作業を実施した。

遺構確認作業の結果、溝跡2条、土壙7基、ピット23基が検出された。順次遺構精査を実施し、合せて遺構断面図・平面図、個別の写真撮影等の記録作成作業を実施した。平成30年11月29日高所作業車による全景写真撮影を実施した。平成30年12月14日までに現地調査を終了した。12月18日器材搬出、12月20日埋蔵物発見届（小川警察署長宛）と埋蔵文化財保管証（埼玉県教育長宛）を提出した。

(2) 報告書作成

3 発掘調査・報告書作成の組織

平成30年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調 査 部	調 査 部 長	瀧 瀬 芳 之
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 副 部 長	吉 田 稔	
総務部		主幹兼調査第二課長	上 野 真由美	
総務部副部長	田 中 広 明	主 任 専 門 員	赤 熊 浩 一	
総務課長	新 井 了 悟			

令和3年度（発掘調査）

理 事 長	依 田 英 樹	調 査 部	調 査 部 長	田 中 広 明
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 副 部 長	福 田 聖	
総務部		整 理 第 二 課 長	金 子 直 行	
総務部副部長	上 野 真由美	主 任 専 門 員	富 田 和 夫	
総務課長	鈴 木 裕 一			

報告書作成事業は、令和3年11月1日から令和3年12月31日まで実施した。遺物は水洗・注記後、接合・復元作業を行った。接合した遺物は実測図を作成した。実測には磁気式三次元位置測定装置、正射投影画像撮影機を活用した。遺物実測図はトレースと必要に応じて拓本を採った。スキヤナを使用してこれらをデジタルデータ化し、編集して挿図版下を作成した。また令和3年12月に遺物写真を撮影し、写真図版の版下を作成した。

遺構は、発掘調査で作成された平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。パソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下を作成した。遺構写真は、発掘調査で撮影したものから選択・編集し、写真図版用の版下を作成した。令和3年11月下旬から12月にかけて原稿を執筆し、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付を作成した。

12月24日印刷業者に入稿し、校正を3回行い、令和4年2月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第472集『古里古墳群清水支群』（本書）を刊行した。図面・写真・データ・遺物等の諸資料は、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

古里古墳群は嵐山町の最北端、東武東上線武藏嵐山駅の北約8km、関越自動車道嵐山小川インターチェンジから北に約5kmの比企郡嵐山町古里に所在する。北は深谷市、東は熊谷市、西は小川町・寄居町と境を接する。

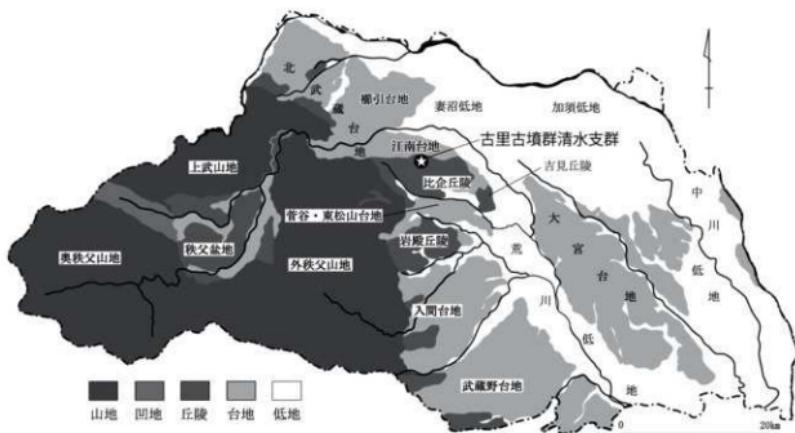
嵐山町周辺の地形は、西方に秩父山地、東方に関東平野が広がり、大まかに山地、丘陵、台地に分けることができる。特に丘陵地形が町内の大部分を占めている。この丘陵は比企丘陵と呼ばれ、古里古墳群は比企丘陵の北端に位置する。比企丘陵は外秩父山地から東に半島状に突出し、嵐山町七郷に由来する「七郷層」と呼ばれる第三紀に形成された岩盤層を基層としている。北側は江南台地、南側は皆谷台地と東松山台地、東は独立丘陵状の吉見丘陵に区分される。東松山台地の南には岩殿丘陵（物見山丘陵）が広がっている。標高は二ノ宮山（132m）を最高地点として概ね70～100m前後である。

比企丘陵は棚川、兜川、滑川、柏川、市野川な

ど中小河川によって開析され、幾筋もの支谷と尾根が形成されている。樹枝状の複雑な地形が発達した谷の奥には溜池が数多く存在し、谷津田の灌溉に利用してきた。溜池は比企丘陵を象徴する景観を作ってきたともいえ、古里古墳群の周辺にも岩根沢沼と駒込沼が存在している。

古里古墳群の南側は滑川が東流し、熊谷市との境界付近で南東に流路を変える。この滑川流域では段丘崖の発達がみられず、丘陵と沖積地の間は緩斜面となっている。一方、古墳群の北側は東流する和田川を挟んで江南台地に移行する。江南台地は荒川によって形成された河岸段丘の上位段丘面にあたり、下末吉面に対比されている。小支谷が発達し、複雑な地形が形成された比企丘陵と対照的である。

嵐山町の古墳群は、こうした冲積地を望む丘陵の先端部分を好んで選地しており、それぞれが尾根毎にまとまりをなして形成されている。



第1図 埼玉県の地形

2 歴史的環境

本節では、古里古墳群周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代

嵐山町内における旧石器時代の遺跡は少なく、行司免遺跡でナイフ形石器3点、槍先型尖頭器4点など、尺尻遺跡(29)からナイフ形石器1点が採集されている。滑川町用土庵B遺跡(88)からは石刃とナイフ形石器、二ツ沼南遺跡(84)からは搔器が出土した。また、古里古墳群から東に約15kmに位置する熊谷市塩西遺跡(158)からはナイフ形石器文化期の資料が出土した。寄居町赤浜牛無具利遺跡(216)や稻荷窟遺跡では石器集中からナイフ形石器・搔器が出土した他、深谷市白草遺跡(202)は細石刃文化期の良好な遺跡である。

縄文時代

縄文時代草創期では、古里古墳群内の南面する丘陵斜面に位置する北田遺跡(2)からは多縄文系土器の細片が出土した。滑川町打越遺跡から約400点の多縄文系土器と竪穴住居跡が発見され、深谷市宮林遺跡と共に最古段階の竪穴住居跡と考えられている。江南台地上の深谷市四反歩遺跡(193)や上本田遺跡(200)からは有舌尖頭器が発見されている。

早期になると遺跡がやや増加するが、なお前半段階では少ない。越畠城跡(39)、年中坂A遺跡(90)・年中坂B遺跡(36)、北田遺跡から撚糸文、沈線文土器が、塩前遺跡(152)からは撚糸文、押型文、条痕文系土器群が出土している。深谷市四反歩遺跡からは、撚糸文期の住居跡7軒が発見された。早期後半になると、遺物が出土する遺跡は増加する傾向にあるが、遺構の検出例は少ない。そのなかで、金平遺跡(52)では条痕文系野島式土器を伴う住居跡6軒が検出され、定住生活が本格的に始まったことがわかる。また、丘陵に位置する亥遺跡(33)からは条痕文期と思われる10基の炉穴が検出された。北田遺跡からも早期

末葉の住居跡が1軒発見されている。

前期には遺跡が急増するが、黒浜式期以降の遺跡が圧倒的に多い。前期前半の花積下層～関山式期の遺跡は、越畠城跡・花見堂遺跡(51)・寺山遺跡(62)、屋田遺跡(67)、小川町平松台遺跡(143)・姥ヶ沢遺跡(180)などがある。平松台遺跡からは5軒の竪穴住居跡が検出された。

黒浜式期～諸磯式期の遺跡としては、都幾川流域の平松台遺跡、山根遺跡(55)が調査されている。山根遺跡は黒浜式期～諸磯式期にかけての住居跡が14軒検出され、広場を開む中期的な環状集落が形成された(嵐山町1987)。また、該期の遺跡は丘陵上にも進出し、油面遺跡(30)では狭い尾根上などから住居跡が4軒検出されている。

中期になると集落の更なる増加と大規模化が進み、行司免遺跡、中郷遺跡(44)、金平遺跡などがあげられる。特に行司免遺跡は、勝坂式期～加曾利E式期を主体に営まれた大規模環状集落で、調査された住居跡は261軒を数える。

後期になると、中期から一変して遺跡数も規模も急激に減少する。称名寺式土器を伴う柄鏡形の敷石住居跡が検出された金平遺跡、花見堂遺跡、行司免遺跡などで小規模な集落跡が確認される程度である。これは晚期に至るとより顯著で、北田遺跡、花見堂遺跡、屋田遺跡、東松山市附川遺跡などから浮線文土器の破片が検出されているが、明確な遺構は発見されなくなる。後・晚期の急激な遺跡の減少はこの地域の普遍的な現象で、遺跡が確認できない状態は弥生時代中期まで続く。

弥生時代

弥生時代前期から中期にかけての遺跡は殆ど発見されていないが、大野田西遺跡(26)から中期後半の壺胴部破片、金平遺跡から無文の壺型土器と竈描山型文と太い沈線による櫛描簾状文を施す甕の破片が出土した。中期末～後期前半の所産であろう。

後期になると、生産域と考えられる沖積地に面した丘陵の先端に集落が形成される。滑川を望む丘陵から裾部にかけては後期前半の岩鼻式期から吉ヶ谷式期の遺跡がまとまっており、船川遺跡(75)、25軒の住居跡が確認された大野田西遺跡や蟹沢遺跡(23)、屋田遺跡が形成される。

江南台地上では、深谷市の万願寺遺跡(196)焼谷遺跡(190)、円阿弥遺跡(199)、富士山遺跡(179)、白草遺跡、熊谷市(旧江南町)の姥ヶ沢遺跡を含む千代遺跡群などで集落跡が確認された。富士山遺跡は岩鼻式期、他は吉ヶ谷期の遺跡である。

古墳時代

前期の遺跡としては、北田遺跡から2軒の住居跡と1基の土壙が検出された。花見堂遺跡からは古墳時代前期の住居跡が8軒検出されている。都幾川右岸の段丘面に立地する行司免遺跡からは古墳時代前期から中期の住居跡が8軒、前期の方形周溝墓が10基検出され、周辺でも最大規模の集落である。熊谷市塩西遺跡から古墳時代前期の祭祀土壙が1基、塩丸山遺跡(154)から住居跡1軒、諸ヶ谷遺跡(150)から住居跡1軒が発見された。

古墳では丘陵上に塩古墳群(155)第I支群が形成される。2基の前方後方墳と21基の方墳で構成されており、前方後方墳からは底部穿孔された壺が出土した。調査された狸塚25号墳は、一辺8mの方墳である。主体部は木棺直葬で、副葬品の鉄劍とガラス玉が出土した。この塩古墳群第I支群は滑川上流域における古墳の初現であり、後に展開する塩古墳群の他支群や古里古墳群は、そこから派生した古墳群と捉えることもできる。

中期古墳は滑川町屋田遺跡第1・4号墳が該当する。和泉期の高杯や壠などが開溝等から発見されている。集落跡は、前述した行司免遺跡が最大規模の集落跡で、和泉期の住居跡にはカマドを持つものと持たないものが併存していた。金平遺跡では和泉期末葉から鬼高期初頭の住居跡が6軒検

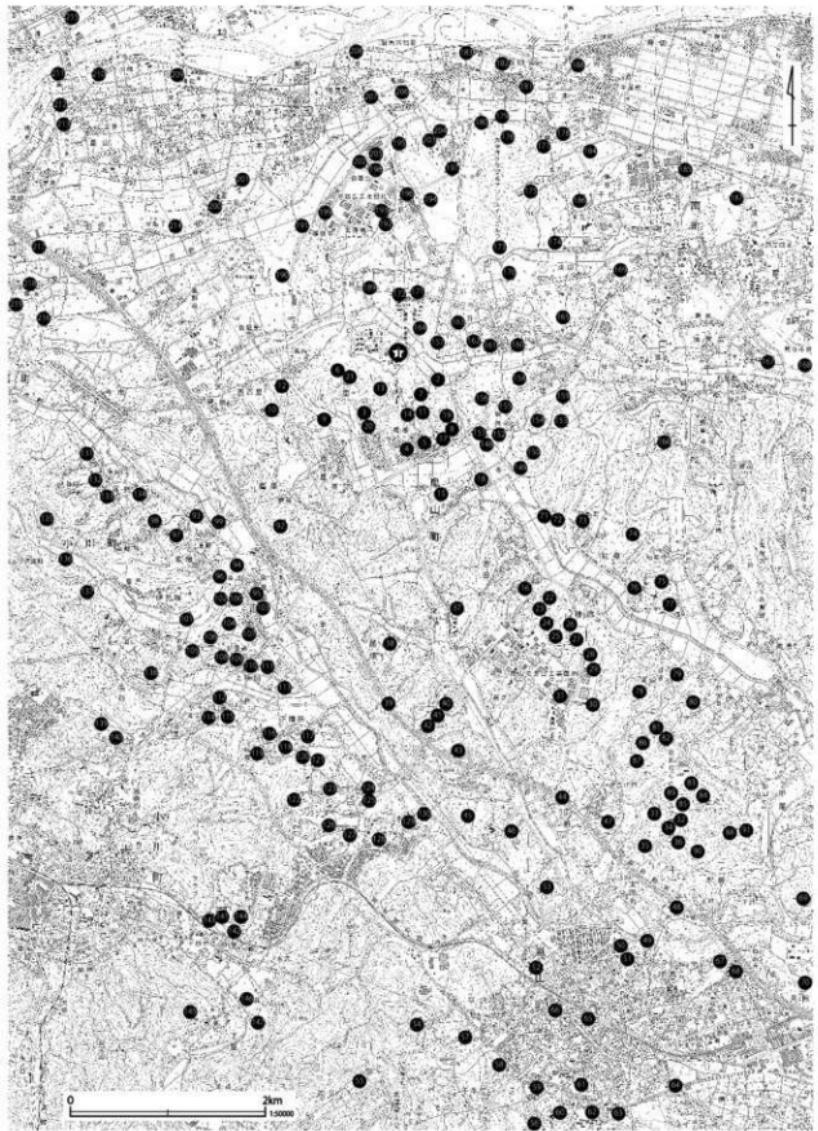
出された。熊谷市塩新田遺跡第1号竪穴住居跡は和泉期前半の住居跡で脚部の長い高杯や、球胴の平底甕などが出土した。

後期には多くの古墳群が成立し、把握される遺跡数は飛躍的に増加する。古墳が丘陵から台地部分にかけて広く展開する状況に対して、対応するであろう集落遺跡の確認例は圧倒的に少ない。古里古墳群周辺の集落跡は、滑川の沖積地を挟んだ対岸の丘陵上の西ノ谷遺跡(15)から6軒の住居跡が検出された程度である。東落合遺跡から後期の住居跡18軒が検出されている。和田川流域右岸の塩西遺跡で11軒の住居跡が確認された。和田川流域左岸では本田東台遺跡(167)で大規模な集落跡が発見され、「踊る埴輪」が出土した古墳として著名な野原古墳群(168)が隣接することから、野原古墳群を營造した首長層との強い関わりが想定されている(江南町1995)。

古墳群の多くは、円墳を主体とした6世紀から7世紀にかけてのもので、7世紀前後に築造された古墳は、主体部に胸張を持つ横穴式石室を採用する例が多い。滑川流域では、古里古墳群(1)や塩古墳群、天神山古墳群(22)が存在し、和田川沿いでは、立野古墳群(157)、桜山古墳群(172)、野原古墳群などが存在する。

荒川右岸には鹿島古墳群(208)、塚原古墳群(209)、市ノ川流域では、嵐山町から滑川町にかけて分布する大規模な屋田(月輪)古墳群(67・68)、嵐山町花見堂古墳群(50)、小川町鷹巣山古墳(92)などがある。古里古墳群の北東には、熊谷市権現坂埴輪窯跡(177)と姥ヶ沢埴輪窯跡(176)が存在し、古里古墳群及び塩古墳群に供給された埴輪の一部は、両窯跡から供給された可能性が高い。周辺にある古墳との受給関係が注目される。

滑川町寺谷庵寺は飛鳥寺系の東日本最古級の瓦をもつことで知られており、周辺には五厘沼(羽尾)窯跡、平谷窯跡(瓦陶兼業)、花気窯跡(滑川町2020)の須恵器窯跡が築窯されている。



奈良・平安時代

古里古墳群の周辺には該期の集落は殆ど検出されていない。市野川右岸の金平遺跡は30軒の住居跡が調査され、8世紀初頭～9世紀後半まで集落が継続した。市野川と粕川に挟まれた低丘陵に立地する六丁遺跡（53）からは34軒の住居跡と2基の井戸跡が検出された。周辺の可耕地を背景に成立した集落で、8世紀前半から10世紀にかけて営まれた。同様に、粕川と市野川に挟まれた丘陵上に立地する大木前遺跡（40）からは7世紀後半～9世紀末葉の住居跡が12軒、隣接する小栗遺跡（42）からは住居跡5軒、小川町日向遺跡（123）からは22軒の住居跡が検出され、8世紀前半から9世紀中頃まで集落が継続した。嵐山町谷ツ遺跡（43）も同様な立地で、7世紀末葉～10世紀前半の住居跡31軒が調査された。

一方、粕川と滑川に挟まれた急峻な丘陵地にも多数の遺跡が営まれたことが明らかになった。滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群では13遺跡が確認され、天裏遺跡（91）で36軒、柳沢A遺跡（86）で15軒、柳沢B遺跡（87）で11軒の住居跡が検出されたが、他は10軒に満たない小規模な集落であった。また、年中坂A遺跡からは8世紀初頭の須恵器窯跡が1基単独で検出されている。

花見台工業団地内遺跡群でも同様な傾向が認められ、蟹沢遺跡で12軒、新田坊遺跡（31）で11軒検出された他は、大野田西遺跡や油面遺跡から1～3軒の住居跡が検出されたにとどまる。

丘陵奥にまで遺跡が進出する背景として、技術力をもった集団が組織的に丘陵開発に着手したという指摘がある（植木1995）。また、渡辺一は8世紀以降丘陵内に集落が進出した要因に、炭焼き等森林の用益活動専用の居住地の成立を想定した。住居の継続性や再生産機能の乏しさを「疑似集落」、「第2の集落」と呼び、9世紀後半まで存続したと考え、その一方で、「離れ国分」と言われてきた1軒または2軒の住居跡に仏教関係遺物

が伴う場合が多い点を指摘した。柳沢A遺跡からは四面廻の仏堂、中尾遺跡（89）、用土庵B遺跡、天裏遺跡からは瓦塔が出土し、丘陵の奥の遺跡形成と仏教的な営為を示す例が増えている。

本格的な伽藍を備えた仏教寺院は、熊谷市寺内廃寺（173）がある。小川町慈光平廃寺は108箇所の平場を備えた山岳寺院である。比企丘陵には大平山山腹の標高120～140mに位置する比企尼山廃寺がある。雛壇上に造成され、平場には建物跡と瓦が発見された。出土遺物から8世紀～9世紀末頃まで存続したことが判明している。

比企丘陵内の将軍沢窯跡群では、須恵器生産が大規模に行われた。篠新田遺跡からは須恵器生産に伴う工房跡や工人集落が検出され、須恵器生産に関わる遺跡群が大規模に展開したと思われる。

中世

中世には鎌倉街道上道が嵐山町内を通過した。笛吹峠から大藏館跡、菅谷館（60）を経て、寄居町今市を通過するルートである。ルートに沿う寄居町塚田遺跡（218）、前塚田遺跡（219）は中世の鉄造遺跡で、梵鐘や鍋の鋳型、溶解炉などが発見され、「塚田鈔物師」の本拠地と推定されている。

嵐山町ではこの街道に沿って大藏館跡、菅谷館跡、平沢寺、金平遺跡など多数の中世遺跡が知られている。菅谷館跡は畠山重忠の居館とされ、旧平沢寺から発見された久安四年（1148）銘の鋳銅製経筒に刻まれた「平朝臣茲綱」は、畠山重忠の祖「秩父重綱」と考えられている。金平遺跡からは梵鐘や仏具などを鋳造した工房跡が検出された。鋳型の銘から弘安四年（1281）蒙古襲来の年、仏具を生産していた状況が確認され、平沢寺との関係が示唆された。旧平沢寺僧房群は、四面堂跡や池跡を有し、地方寺院としては破格の規模を誇っていたことが判明した。

戦国期には後北条氏による甲斐武田氏、越後上杉氏に対する防衛ラインとして、菅谷城、杉山城、越畠城等の城郭が整備されたのである。

III 遺跡の概要

1 古墳群の概要

古里古墳群は嵐山町古里地内に所在し、比企丘陵の北端部に位置する。古墳群は丘陵の尾根や支丘ごとに小規模なまとまりで構成され、全部で11支群から成る。古里古墳群東側には熊谷市塩古墳群、和田川を挟んだ北側の江南台地には立野古墳群が分布し、古墳群の密集地域を形成している。

古里古墳群には52基を超える古墳が確認されているが、削平されて消滅した古墳を含めると相当数に上ると推定される。また、古里古墳群と塩古墳群は不可分な存在であり、ほぼ同一古墳群の一部とみることができる。

古里古墳群は6世紀前半から7世紀前半にかけて築造されたと考えられているが、築造始期は5世紀代に遡る可能性の高いことが指摘されている（埼埋文2009）。また、丘陵の裾部に築造された古墳は埴輪を持ち、丘陵の標高の高い地点に築造された古墳は埴輪を持たないことから、6世紀前半を中心に竪穴系主体部を持つ古式群集墳として、丘陵斜面下位から裾部に広く展開した後、横穴式石室を持つ新式群集墳として丘陵斜面上部に墓域を拡大したことが予想されている（埼埋文前掲書）。

古里古墳群は、駒込、尾根、尾根西、岩根沢横穴墓、上土橋、北田、清水、二塚、蟹沢、上耕地、神山の11支群が確認されている（第3・4図）。現状で知られている古墳はすべて径20m以下の小円墳で、前方後円墳や大型の円墳、方墳は確認されていない。また、岩根沢沼の谷頭付近には横穴墓が開口している。確認されているのは片袖式の横穴墓が1基のみであるが、本来群を構成していた可能性がある。現在までに、駒込支群第1・2・27号墳、北田支群第1～3号墳、尾根支群第5・10号墳、上土橋支群第1号墳の発掘調査が実施されている。駒込支群とその周辺の様相について触れておく。

駒込支群

古里古墳群中最大の支群で、27基が確認されている。古墳は標高84.2mの丘陵頂部から南に延びる尾根の斜面にかけて分布し、特に標高約60mの丘陵先端部に集中する。第23号墳は凝灰岩製の石室が露出している。支群の築造年代は6世紀前半から7世紀前半にかけて継続したと推定される。1986年嵐山町遺跡調査会によって第1・2号墳、2003年当事業団によって第27号墳が調査された。第27号墳は径12～13mの円墳と推定され、周溝から土器壺と少量の埴輪片が出土した。遺物から6世紀前葉の築造と推定された（埼埋文前掲書）。

尾根支群

駒込支群の西側至近距離に位置する。11基が確認されており、標高約70mの丘陵斜面に築造され、駒込支群よりも古墳の集中域がより高所にある。斜面裾にも存在した可能性はあるが、現存する古墳はない。平成3年度に第5号墳が、平成5年度に第10号墳が嵐山町教育委員会により調査された。第5号墳は墳丘の半分が調査され、規模は直径約20mと推定されている。埴輪列が検出され、主体部は粘土壠または石壠と思われる。10号墳は直径約18mの円墳で、埴輪列が検出された。6世紀中葉から後半の築造と考えられている。

尾根西支群

尾根西支群は、尾根支群の南西側に形成され、破壊により墳丘は確認できないが3基の古墳の存在が想定されている。

上土橋支群

上土橋支群は尾根支群の北側にあり、丘陵の頂点からやや北に傾斜した地点に展開する。4基の円墳が確認され、1号墳は昭和61年度に嵐山町遺跡調査会によって発掘調査されている。円墳と思われる周溝の一部が検出され、須恵器片（提瓶

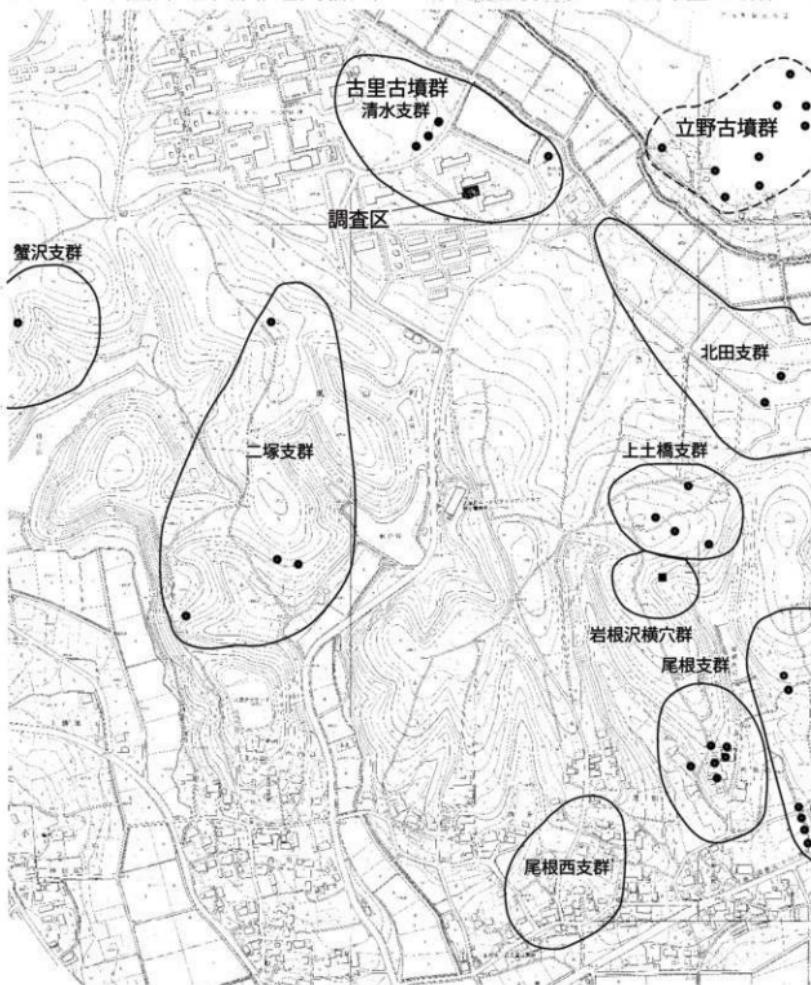
か？）が出土した（嵐山町遺跡調査会1987）。

北田支群

北田支群は、古里古墳群の北東側にあり、和田川に面した低丘陵上に立地している。5基が確認されているが、熊谷市（旧江南町）塩古墳群西原

支群と分布域が重複している。1～3号墳は昭和60年度、嵐山町教育委員会により発掘調査された。

2号墳は直径12.2～15.5m、高さ3.4mの円墳で、周溝は全周する。主体部は凝灰岩切石組積みの胴張形横穴式石室である。奥壁と天井部には



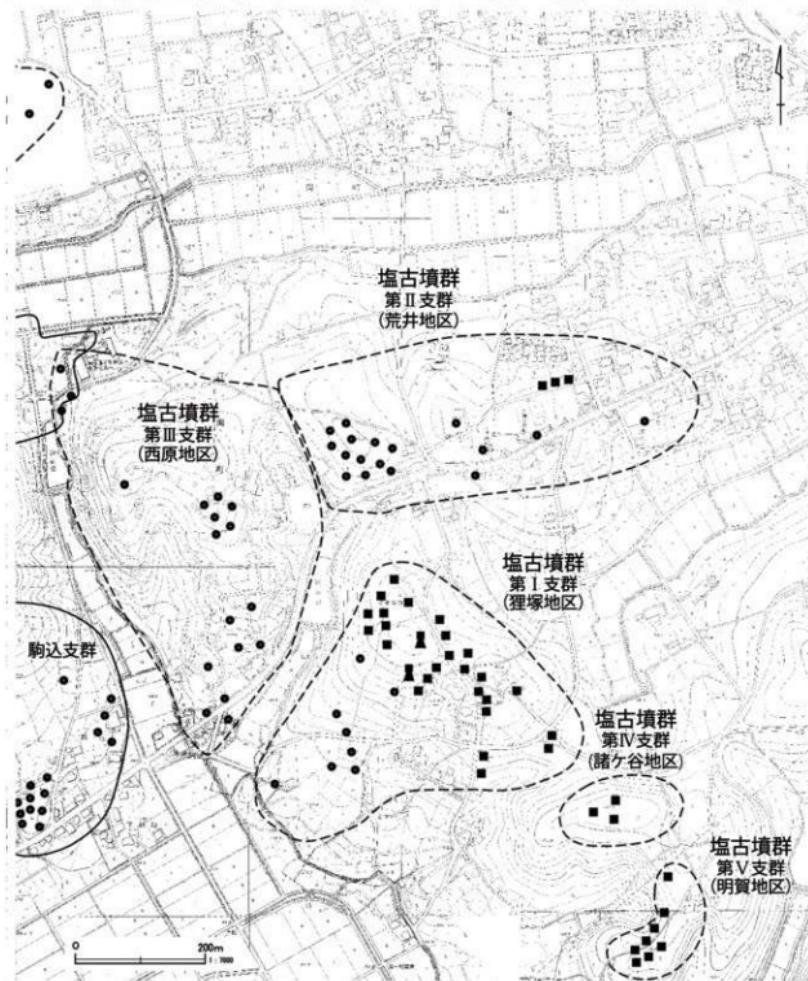
第3図 古里古墳群古墳分布図（1）

大型の切石を1枚使用し、側壁には切石を丁寧に並べていた。南比企産の須恵器提瓶片と須恵器大甕片が出土した。埴輪は検出されず、7世紀前半の築造と推定される。3号墳は主体部の一部が露出していた。凝灰岩切石積の横穴式石室で、最下

部のみ遺存していた。

塩古墳群

塩古墳群は北田支群と一部重複しつつ東側に展開する。滑川左岸にI～V・VII支群の6支群が、和田川右岸にII支群の一部とVI支群が位置し、98



第4図 古里古墳群古墳分布図（2）

基の古墳から構成される（江南町1995）。古墳時代前期から形成される古墳群で、前方後方墳や方墳（方形周溝墓）を含むことが特徴である。後期

2 調査区の概要

古里古墳群清水支群は、埼玉県比企郡嵐山町大字古里の埼玉県立嵐山郷内に所在する。比企丘陵の北端部に位置し、東西に延びる尾根の北東に傾斜する斜面に立地する。北側には和田川が東流し、その北側は江南台地が広がっている。南側には滑川に開析された樹枝状の地形が広がっている。

清水支群は現在までに4基の古墳が確認されている。いずれも埼玉県立嵐山郷の敷地内にあり、2基は墳丘が残存している。

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代後期の溝跡2条、土壙7基、ピット23基である。調査区は東西に長い不整長方形で、調査面積は264m²、標高は72~74mである。調査区の地形は西から東、調査区北側では北東に向かって傾斜しており、調査区内で0.8mの比高差がある。

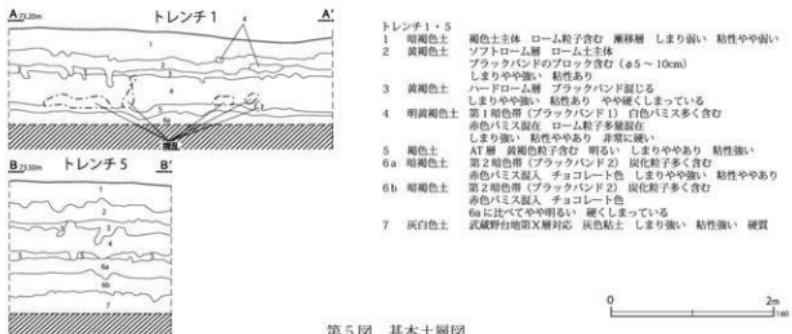
まず、調査区の基本層序は第5図に示した。第1層はローム漸移層で、黒色腐植土層は発達していない。縄文時代の土器と石器が含まれる。第2層は遺構確認面としたソフトローム層で、地表から0.2~0.4mの深さである。第3層はハードロー

ム層、第4層は第1暗色帯で、白色バミスを多く含む。第5層はいわゆるAT層（姶良・丹沢火山灰層）と考えられる。第6層は第2暗色帯に相当する。赤色バミスが含まれ、上下2層に分かれ。第7層は灰白色粘質土で、武藏野台地の第X層対応層と考えられる。

溝跡は2条あり、第1号溝跡からは古墳時代後期の土師器長甕が投棄されたような状態で出土した。古墳の可能性を考えたが、現状で古墳の一部と想定することは難しかった。第2号溝跡は浅い溝跡で古墳時代後期の土器片が少量出土した。性格は不明である。

土壙は7基検出された。第6・7号土壙は第1号溝跡底面から掘り込まれていた。2基ともに規模・形態が類似していた。溝掘削直後または、掘削後あまり期間を置かずに掘り込まれたものと推定された。墓壙が想起されたが、断定には至らなかつた。いずれにせよ、第1号溝跡に関連する性格と思われる。

ピットは23基検出された。規則的に並ぶものはなく、柱痕も認められなかった。

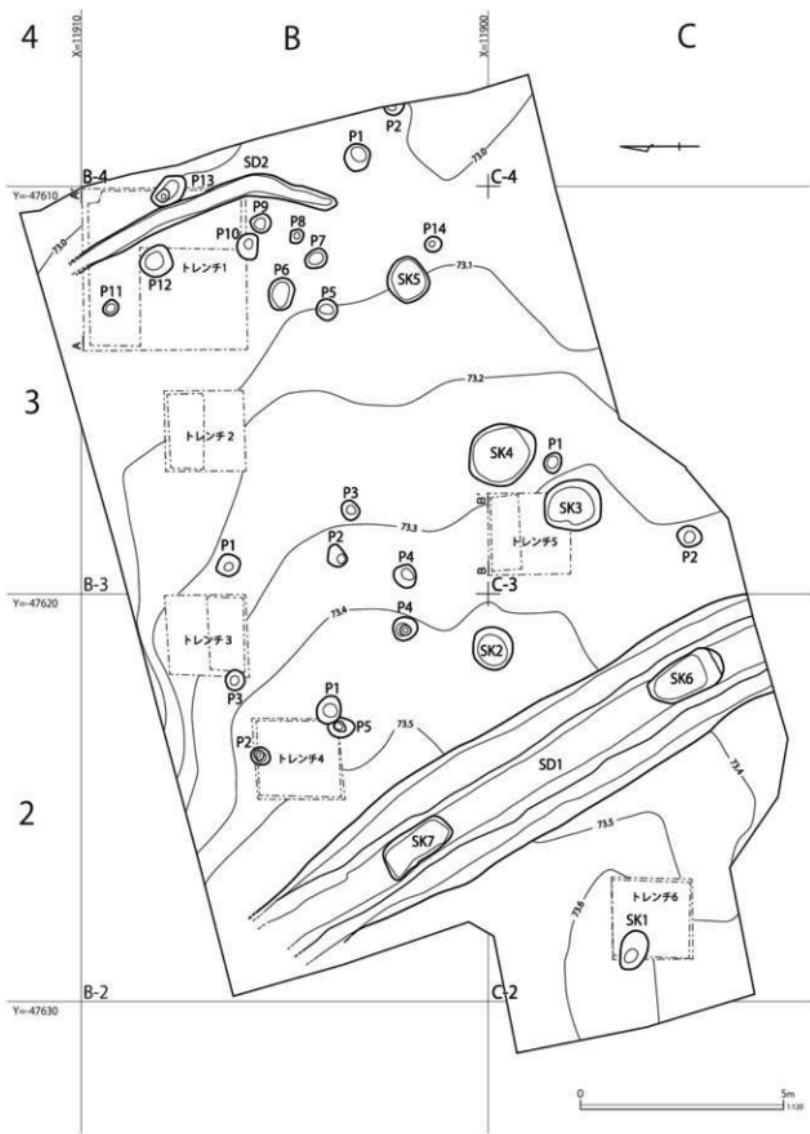


第5図 基本土層図

4

B

C



第6図 全体図

IV 遺構と遺物

1 古墳時代から古代の遺構と遺物

(1) 溝跡

第1号溝跡（第7・8図）

第1号溝跡は調査区西端のB2・C2グリッドに位置する。北北西から南南東方向にはほぼ直線的に延び、両端は調査区外に抜けている。走向方位は北から約30°西に振れている。地形的には西から東に傾斜しており、概ね地形に平行して掘削されていた。残存長は14.40m、最大幅は中央部で3.00m、北側で1.98m、南端部で2.52mである。深さは0.81～1.05mである。

底面は二段に掘り込まれ、二段目の掘り込みは幅1.2～1.5mで、その両側にテラス状の緩斜面が設けられている。底面は平坦で、ロームブロックが充填されたような貼床状の堆積状況であった。底面の標高は、北側で72.77m、南側で72.53mと0.24m南側が僅かに低くなっている。

溝内からは梢円形の土壙が2基検出された（第6・7号土壙）。溝の二段目の掘り込みに軸を合わせるように掘り込まれていた。溝の埋土が土壤覆土を覆っていたため、埋没段階では溝の方が新しいと考えられた。但し、土壙が溝跡と無関係に掘られたことは考えられず、第1号溝跡掘削直後、あるいは遅くとも第1号溝跡が機能していた段階に掘り込まれたと考えられる。

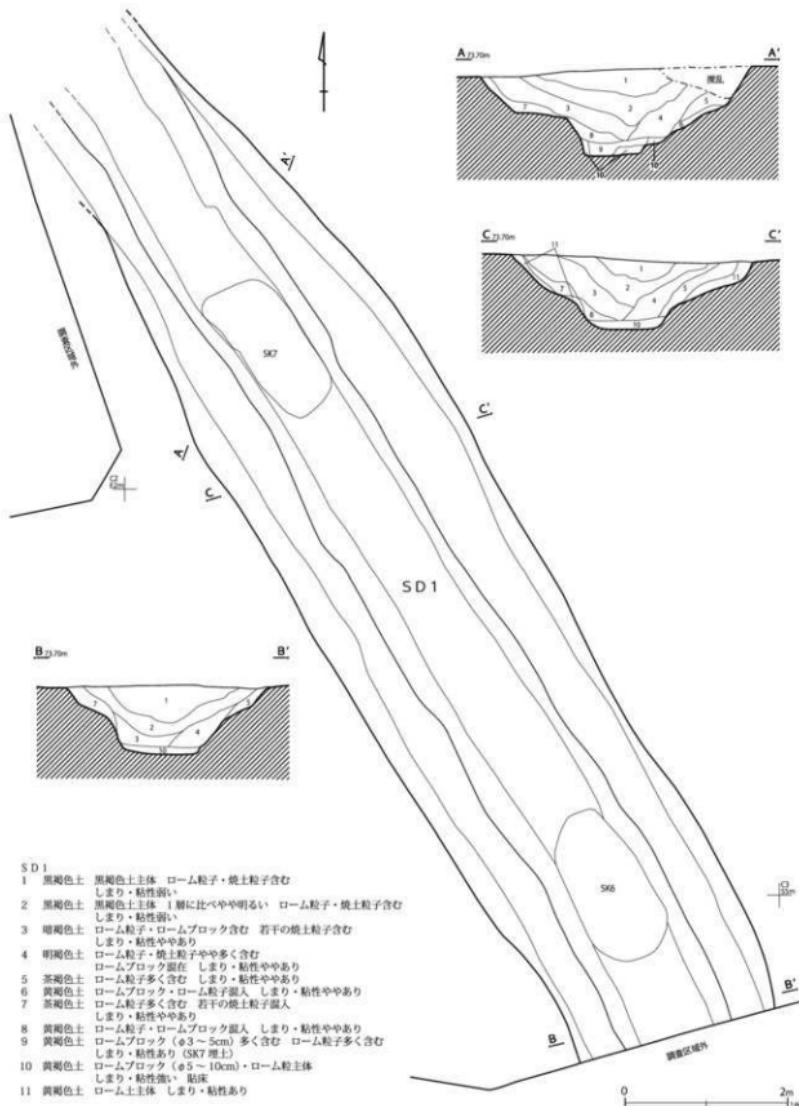
土層は11層に分層された（第7図）。場所は異なっても基本的に同様な土層堆積状況であった。最下層（第10層）にはロームブロックとローム粒子混じりの黄褐色土が堆積し、貼床状に硬く踏み固められていた。第7号土壙との重複箇所では、第10層を一部切り込む形で土壙が掘り込まれていた（第9層）。第9層堆積後は、まず溝の東側から埋没し（第4・5層）、その後西側から堆積した状況が観察された（第3・7・8層）。ローム粒子やロームブロックが多く含有されていた。最

終堆積はローム粒子・焼土粒子混じりの黒色土で埋没していた。

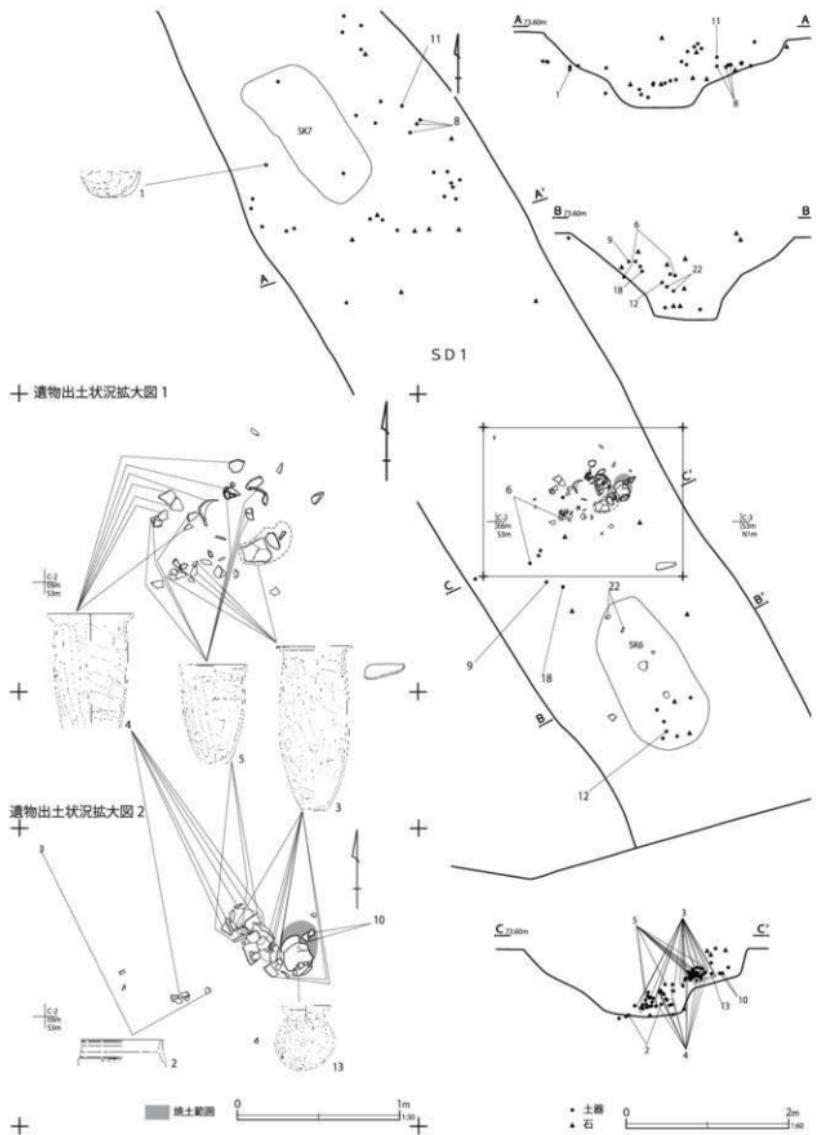
出土遺物は土師器壊・甕・台付甕・瓶、須恵器壊・甕がある（第9図）。その他に縄文土器・石器、近世以降の陶磁器片が出土している（第14～17図）。

古墳時代後期の遺物が主体を占め、奈良時代の土器が若干含まれていた。古墳時代後期の遺物の中で遺存率の高い第9図3～5の土師器甕と13の小型甕は、溝跡中央よりやや南に寄った位置で東岸から壁に沿って投げ込まれたような状況で出土した（第8図）。13の小型甕直下の壁との間隙には焼土塊が検出されたが、その場で被熱したものではないことが判明した。おそらく甕と共に溝中に投棄されたと推定される。奈良時代の遺物は須恵器壊と土師器台付甕破片が出土した（第9図17～22）が、埋没過程の混入と考えられる。土師器台付甕（22）は第6号土壙と溝跡の破片が接合したが、出土位置から溝跡覆土から出土したと判断される。

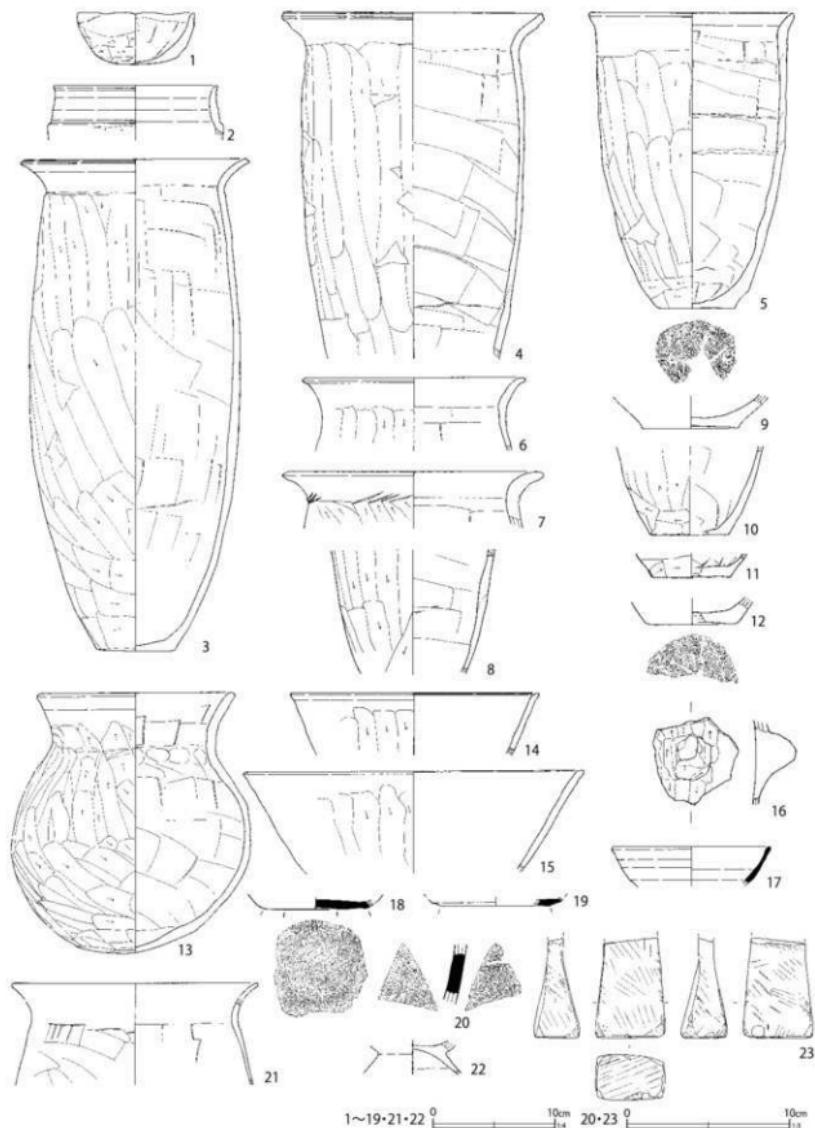
第9図1は粗製の土師器壊で口縁部に雑なヨコナデは施されるが、形態が歪んでいる。2は有段口縁の鉢である。3～12は土師器甕、13は丸底風の小型甕である。3は長甕で器高40.4cm、胴部中位が緩やかに膨らみを持ち、胴部最大径は口径よりも僅かに小さい。長胴甕の中でも器高40cmに及ぶ例は少なく、最も長胴化が進行した段階と捉えることができる。4は胴部下半を欠くが、3同様の長甕である。胴部のふくらみは弱く、最大径は口縁部にある。5は小型の長胴甕である。口縁部のぐびれは弱く、小さく外反する。砲弾形に近い器形で、器高は24.2cmである。13は丸底風の小型甕で、強く被熱している。14～16は土師器甕である。遺物の時期は古墳時代後期、7世紀前半～中



第7図 第1号溝跡



第8図 第1号溝跡遺物出土状況



第9図 第1号溝跡出土遺物

第2表 第1号溝跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	9.3	4.2	4.0	DGIK	50	良好	橙	No125 外面ケズリ 内面ヘラナデ 雜な整形 口縁歪む	5-1
2	土師器	鉢	[13.2]	[4.5]	—	CDI	5	普通	明赤褐	No84・141 接合しない2片 口径不安定 黒色処理か	4-1
3	土師器	甕	18.0	40.4	6.5	ADEGI	60	普通	橙	No37・41・42・44・63・65・67・88・90・91他 外面強く被熱	4-2
4	土師器	甕	[20.8]	[28.3]	—	ACDGK	50	普通	浅黄	No45・47・49・52・62・78他 脚部外面中位以下は被熱か	4-3
5	土師器	甕	(16.6)	24.2	6.2	CDIKL	60	普通	にぶい黄橙	No46・50・51・71・74・89他 底部木葉痕 口縁歪みあり	4-3
6	土師器	甕	[17.8]	[6.0]	—	CDGI	25	普通	にぶい黄橙	No13・19	5-2
7	土師器	甕	[20.0]	[4.6]	—	DEGHIL	15	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	甕	—	[10.1]	—	CDHIK	30	普通	にぶい黄橙	No117・118・135	
9	土師器	壺	—	[2.8]	[7.8]	ADGIL	30	不良	橙	風化のため調整不明	
10	土師器	甕	—	[7.2]	[6.4]	ACDGK	25	普通	にぶい黄橙	No137・143	5-3
11	土師器	甕	—	[2.0]	6.4	DEGI	70	普通	橙	No116	
12	土師器	壺	—	[2.2]	[7.2]	CDGI	45	普通	浅黄	No15 底部木葉痕	
13	土師器	小型甕	15.4	21.7	—	CDEGL	65	普通	にぶい黄橙	No111 胸部上半強く被熱 底部周辺黒斑	4-4
14	土師器	甕	[20.0]	5.1	—	CDGK	15	良好	にぶい橙	小型甕	
15	土師器	甕	27.2	8.3	—	CDGK	10	普通	にぶい橙	煤付着	
16	土師器	甕	—	6.1	—	CDEGIK	5	普通	にぶい黄橙	甕把手	
17	須恵器	壺	[12.8]	3.3	—	DJK	10	良好	灰	南北企産 口径不安定 8c 中葉頃か	
18	須恵器	壺	—	[0.8]	[8.4]	DJ	80	良好	綠灰	南北企産 底部回転系後周辺回転ヘラケズリ	
19	須恵器	壺	—	[0.7]	[9.0]	DJ	5	良好	灰	南北企産 底部回転ヘラケズリ 底径不安定	
20	須恵器	甕	—	—	—	DJ	5	良好	黄灰	南北企産 外面平行叩き 内面当具ナデ消し	
21	土師器	甕	—	[7.0]	—	CDGK	15	良好	橙	武藏型甕 口縁欠失	
22	土師器	台付甕	—	[2.8]	—	CDGIK	70	良好	にぶい橙	No54・SK6・No1 脚部片 武藏型と思われる	
23	石器	砥石	長さ [6.2] 幅4.3 厚さ2.8 重さ82.8g				離岩灰 底面工具痕 侧面使用痕				

葉項に位置付けられる。

17~19の須恵器壺は南北企産で、8世紀前半~中頃の所産と思われる。土師器甕(21)・台付甕(22)は武藏型甕で、須恵器とほぼ同時期と推定される。

第1号溝跡は古墳時代後期（7世紀前半～中葉頃）に掘削され、奈良時代（8世紀前半～中頃）にかけて埋没したと考えられる。砥石(23)はいずれかの時期に属すのであろう。

第2号溝跡（第10図）

第2号溝跡は調査区東端のB-3・4グリッドに位置する。北端は調査区外に延び、南端は調査区内に収まる。北北西から南南東に向かって延び、南端部は緩やかに弧を描くように屈曲する。規模は長さ6.64m、幅は0.48~0.51m、深さは0.03~0.10mである。浅く短い溝跡で、断面形は皿状である。

埋土はローム粒子を含む暗褐色土で大きな土層変化は観察されなかった。

出土遺物は少なく、古墳時代後期の土師器甕・壺の口縁部細片が出土した。実測可能な遺物はない。第1号溝跡と大きな時期差はないと考えられる。

（2）土壤

第1号土壤（第11図）

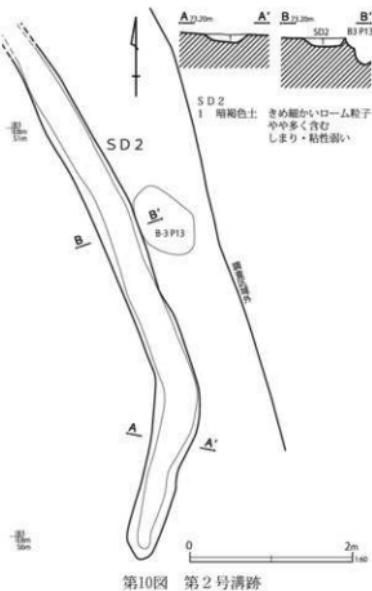
第1号土壤は調査区西端部のC-2グリッドに位置する。梢円形の平面形態で、規模は長径1.0m、短径0.65m、深さ0.43mである。長軸方位はN-68°-Wを指す。底面は西側が深く、東側に向かって徐々に浅くなっている。

埋土は4層に分かれ、第4層にロームが多量に含まれていた。堆積環境は不明である。

遺物は土師器壺細片が1点ある。古墳時代後期と思われるが、詳細は不明である。

第2号土壤（第11図）

第2号土壤は第1号溝跡の東側、B-C-2グリッドに位置する。形態は円形で、規模は直径



第10図 第2号溝跡

1.10×1.02m、深さ0.27mである。断面形は皿状で、底面は緩やかに湾曲する。

埋土はきめ細かいローム粒子・ロームブロックを含む明褐色土単層で、大きな土層変化は観察されなかった。

出土遺物は繩文土器細片と土師器甕の胴部小片がある。古墳時代後期の所産と推定される。

第3号土壙（第11図）

第3号土壙は調査区中央南のC-3グリッドに位置する。形態は略円形で、規模は長径1.43m、短径1.26m、深さ0.22mである。断面形は浅い鍋底状である。土層は3層に分かれ、第1層が暗褐色土、下層の第2・3層が黄褐色土である。自然堆積か否かは判断できなかった。

出土遺物は土師器壺口縁部と甕胴部小片がある。時期は古墳時代後期と推定される。

第4号土壙（第11図）

第4号土壙は第3号土壙の北東側約0.7m、

B・C-3グリッドに位置する。形態は略円形で、規模は直径1.83×1.51m、深さ0.20mである。断面形は浅い皿状である。埋土は2層に分かれ、第1層は暗褐色土、第2層はローム土を含む黄褐色土であった。

出土遺物は土師器甕胴部小片がある。古墳時代後期と推定される。

第5号土壙（第11図）

第5号土壙は調査区東寄りのB-3グリッドに位置する。略円形の平面形態で、規模は直径1.10×0.97m、深さ0.11mである。断面形は浅い皿状である。

覆土は暗褐色土単層で、大きな土層変化は観察されなかった。ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子が含まれていた。

出土遺物は検出されなかった。

第6号土壙（第11図）

第6号土壙は第1号溝跡内のC-2グリッドに位置する。形態は梢円形で、規模は長軸長1.92m、短軸長0.96m、深さ0.43mである。長軸方位はN-29°Wである。土壙は、溝幅底面にはほぼ完全に収まるように掘り込まれていた。主軸は溝の延長方向に一致する。短辺側壁は直角に立ち上っていた。

第1号溝跡の底面に第6号土壙の輪郭が確認された。また断面観察から、第1号溝跡底面の貼床状堆積土（第5層）を切り込んでいることが判明した。堆積状況や位置関係から第1号溝跡掘削直後か、さほど期間を置かず掘削され、その後、溝跡の堆積土が上部を覆ったと考えられる。

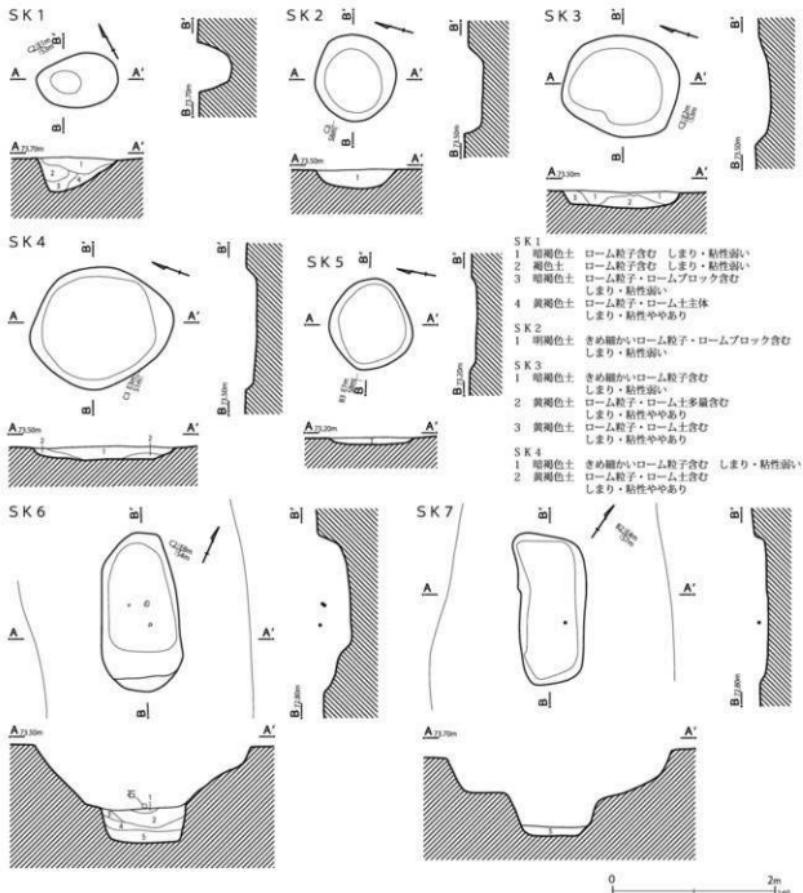
出土遺物は土師器甕と台付甕小片が出土した。第1号溝跡出土の台付甕（第9図22）は奈良時代の所産と考えられる。平面的には土壙内と溝跡の破片が接合したが、垂直分布から溝埋没過程で混入した可能性が高い（第8図）。土壙自体は古墳時代後期に属すると考えられる。土壙北側1mから出土した土師器甕類も無関係ではなかろう。

第7号土壤 (第11図)

第7号土壤は第1号溝跡内のB-2グリッドに位置する。形態はやや崩れた隅丸長方形で、規模は長軸約1.91m、短軸約0.78m、深さ0.42mである。長軸方位はN-32°-Wで、溝跡の延長方

向と一致する。短辺の側壁は垂直に立ち上がっていた。

第6号土壤と規模・形態が類似し、同様の溝内土壤と考えられる。第6号土壤は貼床状堆積土が土壤下面に残っていたが、第7号土壤は貼床状堆



- SK 1 1. 暗褐色土 きめ細かいローム粒子・炭化粒子・焼土粒子含む しまり・粘性弱い
- SK 2 2. 黄褐色土 噴霧色土含む ローム粒子混在 しまり・粘性弱い
- SK 3 3. 黄褐色土 ローム粒子含む しまり・粘性弱い
- SK 4 4. 黄褐色土 ローム粒子・ローム土主体 しまり・粘性やや弱い
- SK 5 5. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性弱い
- SK 6 6. 黄褐色土 きめ細かいローム粒子含む しまり・粘性弱い
- SK 7 7. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性やや弱い

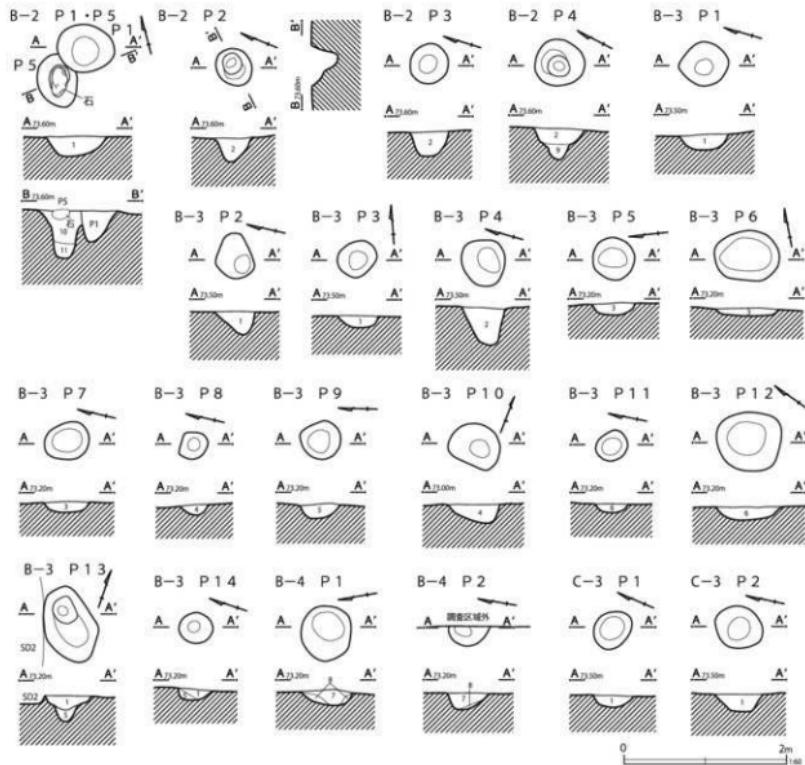
- SK 1 1. 暗褐色土 きめ細かいローム粒子・炭化粒子・焼土粒子含む しまり・粘性弱い
- SK 2 2. 黄褐色土 噴霧色土含む ローム粒子混在 しまり・粘性弱い
- SK 3 3. 黄褐色土 ローム粒子含む しまり・粘性弱い
- SK 4 4. 黄褐色土 ローム粒子・ローム土主体 しまり・粘性やや弱い
- SK 5 5. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性弱い
- SK 6 6. 黄褐色土 きめ細かいローム粒子含む しまり・粘性弱い
- SK 7 7. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性やや弱い

第11図 土壌

積土を掘り抜く部分と、貼床状堆積土を残す部分があった（第7図A-A'断面）。埋土はロームを含む黄褐色土であった。第6号土壇と同様の規模を有する溝内土壤である。おそらくほぼ同時期に掘削されたと考えられる。

出土遺物は土師器甕小片があるが、第1号溝跡埋土中から検出されたもので、直接土壤に伴うものではない。

(3) ピット（第12図）



- 1 暗褐色土 きめ細かいローム粒子含む しまり・粘性弱い
- 2 暗褐色土 きめ細かいローム粒子少量含む しまり・粘性弱い
- 3 喬褐色土 きめ細かいローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性弱い
- 4 喬褐色土 きめ細かいローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性弱い
- 5 喬褐色土 きめ細かいローム粒子含む しまり・粘性弱い
- 6 喬褐色土 きめ細かいローム粒子含む しまり・粘性弱い

ピットは23基検出された。第1号溝跡の東側にあるが、規則的に配置される箇所は認められない。また、断面観察によっても柱痕は検出されず、建物跡は抽出できなかった。規模は第3表に記載した。

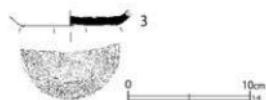
出土遺物はごく少なく、古墳時代後期の有段口縁環がB-3グリッドP12から、土師器台付甕脚部がB-3グリッドP10から出土した（第13図1・2）。7世紀前半頃のものと推定される。

第12図 ピット

- 7 暗褐色土 きめ細かいローム粒子・炭化粒子含む しまり・粘性弱い
- 8 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性ややあり
- 9 砂質土 一粒子・二粒子砂質土含む しまり・粘性弱い
- 10 黄褐色土 きめ細かいローム粒子含む ロームブロック含む しまり・粘性弱い
- 11 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性弱い
- 12 暗褐色土 キメや粗いローム粒子・ロームブロック含む しまり・粘性弱い

第3表 ピット一覧表

位置	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	位置	番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
B-2 グリッド	P 1	72.2	61.0	23.6	B-3 グリッド	P 8	39.2	35.1	14.9
	P 2	48.9	43.3	31.3		P 9	51.4	48.8	20.4
	P 3	51.2	47.6	30.4		P 10	64.8	51.8	26.7
	P 4	63.2	58.5	37.9		P 11	40.7	35.1	9.0
	P 5	67.5	49.4	58.6		P 12	81.1	73.2	19.2
B-3 グリッド	P 1	62.4	55.6	29.4		P 13	96.9	63.8	32.2
	P 2	56.4	45.8	30.1		P 14	41.5	37.7	16.6
	P 3	48.7	42.2	15.9	B-4 グリッド	P 1	68.4	60.7	18.6
	P 4	58.5	53.7	49.5		P 2	47.9	[24.0]	18.0
	P 5	53.1	51.4	14.5	C-3 グリッド	P 1	51.7	42.6	14.6
	P 6	80.8	63.5	10.1		P 2	62.7	52.9	25.0
	P 7	56.4	46.7	12.2					



第13図 ピット・グリッド出土遺物

第4表 ピット・グリッド出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	グリッド	備考
1	土師器	壺	(12.6)	[3.4]	—	CDE	5	良好	にぶい黄橙	B-3	P-12 有段口縁 周辺は不安定
2	土師器	小型台付壺	—	[3.9]	(11.2)	ADGHK	10	普通	にぶい黄橙	B-3	P-10 整形やや雑
3	須恵器	壺	—	[1.2]	8.0	DD	50	良好	青灰	C-2	南比企産 底部系切後回転ヘラケズリ

(4) グリッド出土遺物(第13図)

第13図3はC-2グリッド出土の須恵器壺底部片である。内面は摩滅していた。底部は回転系切

り後回転ヘラケズリ調整されている。奈良時代(8世紀中頃~後半頃)のもので南比企産である。

2 その他の遺物

(1) 繩文時代の遺物

縩文土器(第14図1~54)

グリッドからは、早期初頭から晩期終末までの土器群が出土している。

1~10は早期初頭の燃糸文系土器群である。1は細密なRL縩文を施す井草I式土器の胴部破片である。2、3は間隔の空く燃糸条線を施す稻荷台式土器である。4~10は口縁部に横位の沈線1条を巡らす終末期の東山式土器である。4~6は口縁部、7~10は胴部破片である。

11~22は早期後葉の条痕文系土器群の野島式土器である。11~13は細縫起線区画内に集合沈線文を充填施文するもので、11は口縁部破片である。14から17は無文の口縁部破片で、14の口唇部には刻みを施す。18~21は胴部破片で、22は底部破片

である。

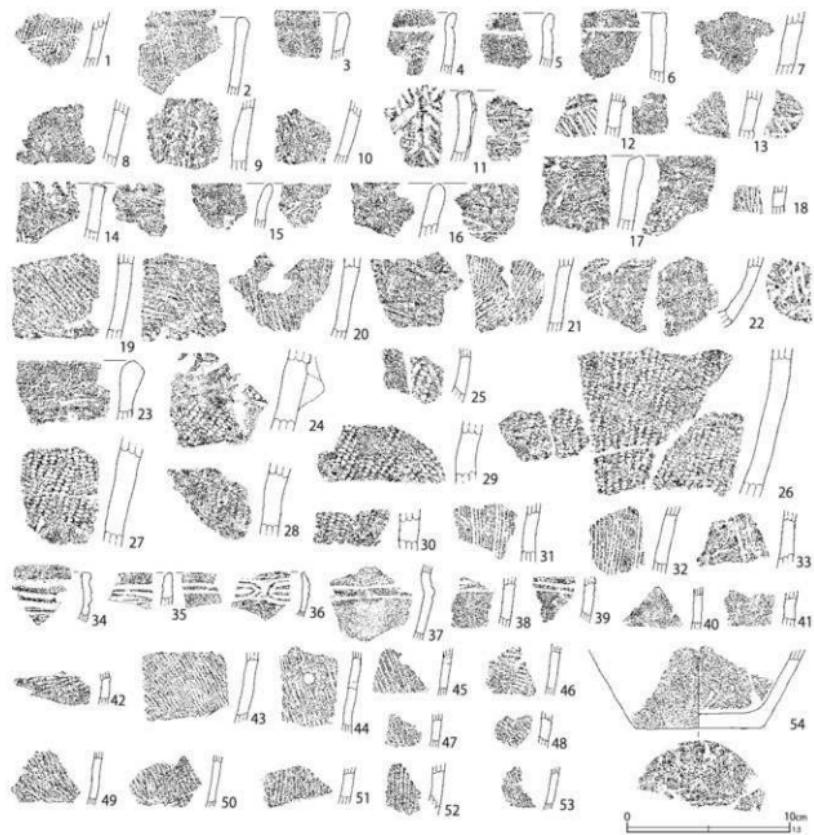
23~33は中期後葉の加曾利E III式土器である。

24、25には磨消溝垂文を施し、31~33には条線文を施文する。地文縩文は全て単節RLである。

34~54は晩期終末の浮線文系土器群である。

34、35は浮線文を施文する鉢形土器で、35の口縁部裏面には2条の沈線が巡る。36はミニチュア土器である。37は2本の沈線が巡る甕形土器の肩部の破片である。外表面はよく磨かれている。38、39は平行沈線を施文する深鉢の胴部破片である。

40~53は胴部破片で、40、41は無文、42、43は縩文、44~49は燃糸文、50~53は条痕文を施文する。44、45は補修孔を持つ。54は無文であるが、胎土、整形等から同時期の底部破片と思われる。底部に木葉痕を残す。



第14図 調文時代の出土遺物（土器）

第5表 出土石器観察表（第15図）

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考	図版
1	石器	頁岩	2.9	1.7	0.4	1.2	トレンチ1	No.1	5-4
2	石器	チャート	1.3	1.0	0.3	0.3	トレンチ5	No.1	5-4
3	石器	チャート	2.1	1.4	0.3	0.6	B-3グリッド	No.37	5-4
4	のみ状石器	緑泥片岩	12.4	3.1	1.6	94.8	SD1	完形	5-6
5	磨石	砂岩	7.9	2.8	1.9	58.8	SD1	No.16 完形	5-6
6	打製石斧	ホルンフェルス	7.4	5.1	2.8	113.9	SD2	完形	5-6
7	打製石斧	ホルンフェルス	11.7	6.1	1.7	138.1	トレンチ6	No.2 分銅形 完形	5-6
8	スタンプ形石器	閃綠岩	9.9	7.5	4.4	477.1	SD1	完形	5-6
9	スタンプ形石器	閃綠岩	13.0	8.7	4.4	617.4	C-2グリッド	No.15 完形	5-6
10	スタンプ形石器	砂岩	9.3	5.4	3.5	251.4	SD1	完形	5-6
11	スタンプ形石器	閃綠岩	10.2	7.0	3.8	347.2	B-3グリッド	完形	5-6

縄文時代の石器（第15図1～11）

グリッド他からは縄文時代の石器が出土している。主な遺物を図化した。

1～3は石鏸で、1は有茎鏸、2・3は無茎（凹基）鏸である。3は石鏸未製品と思われるが、スクレイバーの可能性もある。右側縁を欠損する。1は頁岩、2・3はチャートである。4は綠泥片岩製のみ状石器である。完成品で刃部は研磨されている。5は磨石である。

6・7は打製石斧で、6はいわゆる穢斧、7は分銅形である。いずれもホルンフェルス製である。

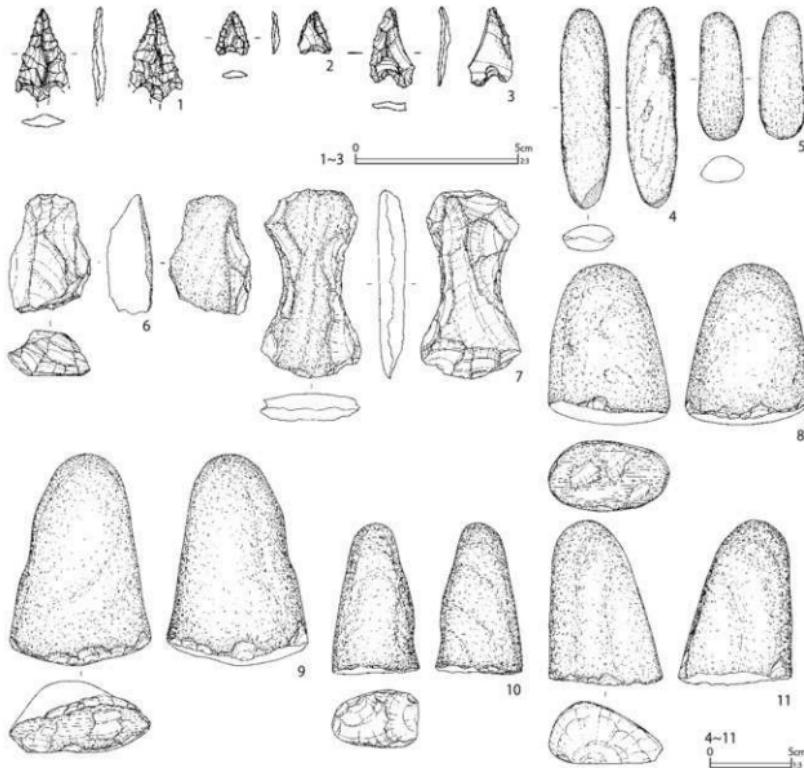
8～11はスタンプ形石器である。8・9は底面が磨かれている。8・9・11は閃緑岩、10は砂岩である。

（2）近世以降の遺物

第16・17図には近世以降の出土遺物を図化した。確実に遺構に伴うものではなく、グリッドやトレンチ、表探から出土した。

1～5は瀬戸美濃系磁器である。いずれも酸化コバルトによる染付文が施釉され19世紀後葉の所産と推定される。

1は八角形皿で、染付文が施文されるが、内面



第15図 縄文時代の出土遺物（石器）

は被熱により退色している。2は皿で見込みに門松状の意匠が描かれている。高台内には「ハリ目」と呼ばれる支焼具痕が4箇所残されていた。

3は筒形の壺である。内外面に酸化コバルトによる染付が付されている。4の内面には型押しの陽刻文が施文される。6は磁質の陶器鉢である。产地不明で、内外面灰釉が施釉される。

7・8は丸底風の土師質土器焙烙である。いずれも内耳が1個残存する。底部は皺状痕が残る。

9・10は土師質土器の焜炉である。10は窓が開く。

11・12は瓦質土器の竈である。12は受け皿が付く。接点のない2片から復元した。煤が付着する。

13は風炉である。抉りは推定である。外面は丁

寧なミガキが施され光沢をもっている。燐されている。接点のない2片から復元した。器高は推定である。

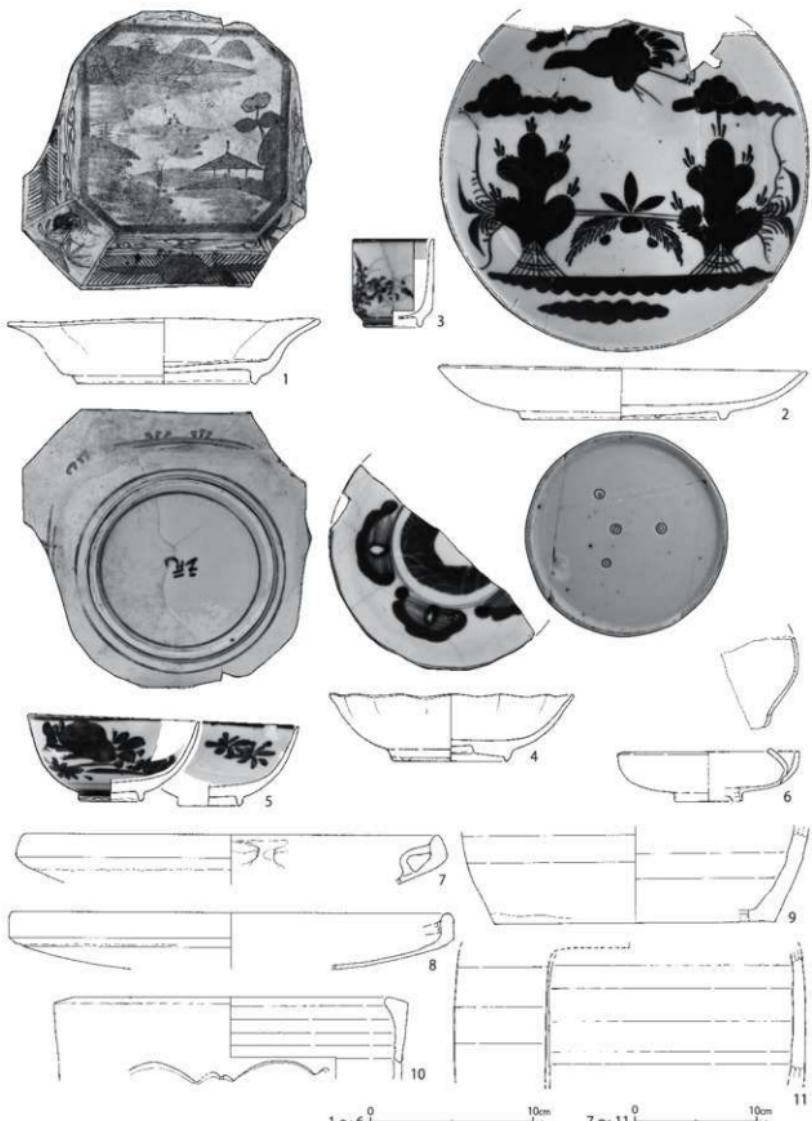
14~17は瓦質土器の火鉢である。14は外面に丁寧なミガキが施される。底面は無調整である。15は内面ミガキ、外面下端はミガキ状のナデか。燐されている。16は火鉢で獅子頭状の把手が付く。貫通孔が穿たれている。外面は桜花、木葉、幾何学文のスタンプ文が施文される。

18は焜炉で窓が開く。外面は丁寧なミガキが施され、その後スタンプ文が施文される。燐されている。

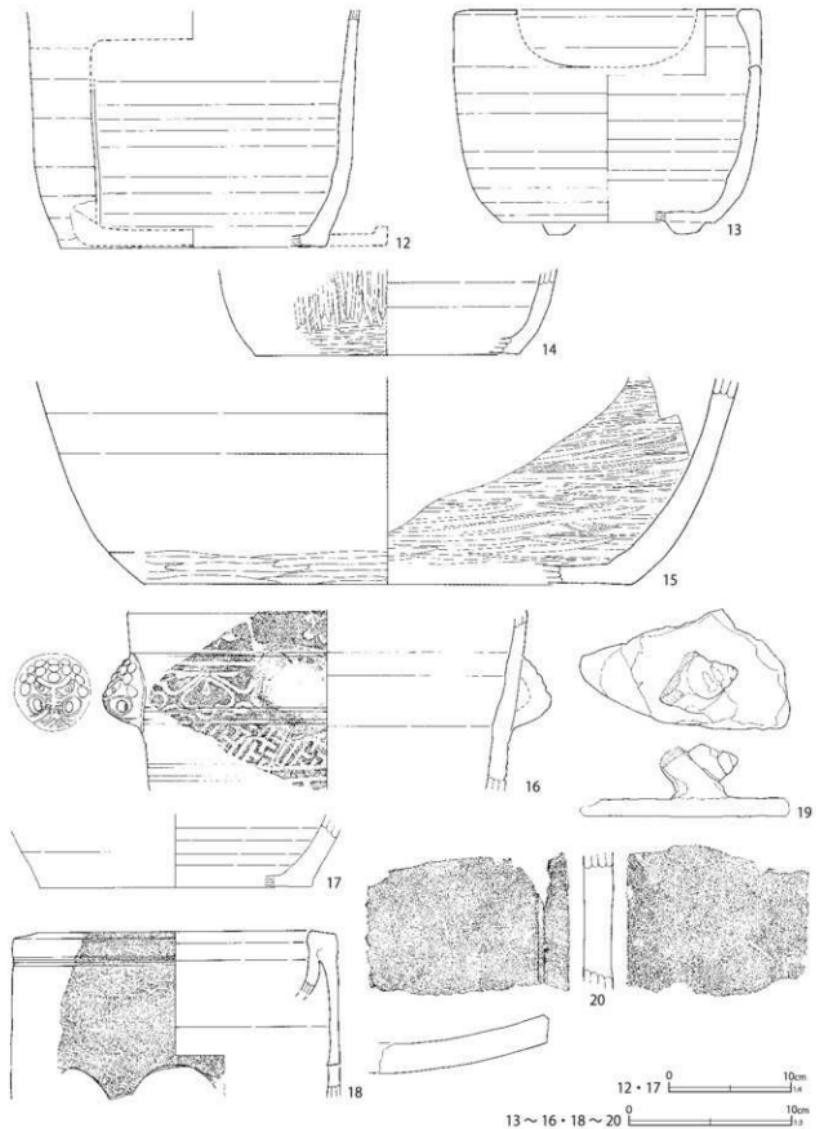
19は仕切盤である。盤上に土製の巻貝が斜めに取り付けられている。20は平瓦である。

第6表 近世以降出土遺物観察表 (第16~17回)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	磁器	皿	(20.2)	4.3	11.6		60	良好	白	表探	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 被熱し退色している 19c 後葉	5-7
2	磁器	皿	22.2	3.7	12.1		80	良好	白	トレンチ1	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面酸化コバルト染付 高台内ハリ支跡 4あり 内面に線状の傷無数 19c 後葉	5-8
3	磁器	壺	(4.8)	5.4	3.2	K	35	良好	白	トレンチ1	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 19c 後葉	6-1
4	磁器	皿	(14.6)	4.1	(6.8)	K	45	良好	白	表探	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 口紅 19c 後葉	6-2
5	磁器	碗	10.4	5.2	3.8	K	90	良好	白	トレンチ1	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 19c 後葉	6-3
6	陶器	鉢	(10.6)	3.3	(4.0)	K	10	普通	灰白	B3グリッド	土師質 内外面灰釉 体部くぼむ 19c 後半	6-4
7	土師質土器	焙烙	(33.6)	[4.0]	—	CDGHHK	30	普通	橙	トレンチ1	内耳1 遺存 底部シワ状条痕 外面煤付着 底面耳込直線的な接合痕か	
8	土師質土器	焙烙	(35.6)	[4.6]	—	CDGHK	30	普通	橙	トレンチ1	内耳1 遺存 底部シワ状条痕 外面煤付着 内底面平滑	6-5
9	土師質土器	焜が類	—	[8.0]	(23.0)	CDI	20	良好	にぶい橙	C2グリッド	内面煤付着 底部ナデ	
10	土師質土器	焜が	(25.8)	[7.1]	—	CIKL	40	良好	橙	C2グリッド	被熱・煤付着 同一個体片1あり	6-6
11	瓦質土器	竈	—	[10.9]	—	CDIK	5	普通	にぶい赤褐色	トレンチ1	ほほ酸化焙成 外面一部黒化	
12	瓦質土器	竈	—	[19.5]	(21.8)	CDGI	25	良好	にぶい橙	C2グリッド	窓・受皿の輪は推定 被熱(橙色) 内外面煤付着 接点のない2片から復元	6-7
13	瓦質土器	風炉	(16.8)	[13.8]	(13.0)	CDGI	20	良好	にぶい橙	C2グリッド	外画面横す 丁寧なミガキ 光沢あり 内面下部煤付着 脚1 遺存 接点のない2片から復元(抉りは推定)	6-8
14	瓦質土器	火鉢類	—	[5.2]	(16.0)	DIK	10	良好	橙	C2グリッド	外画面横す 底部無調整 被熱(橙色化)	
15	瓦質土器	火鉢類	—	[12.8]	(30.0)	CDI	25	普通	にぶい橙	C2グリッド	砂目 水面下位ミガキ状のナデ 内面ミガキ・内外面焼す 弱く被熱(橙色化)	6-9
16	瓦質土器	火鉢	—	[11.0]	—	CDIK	20	良好	橙	C2グリッド	獅子頭状把手 貢通孔あり 外面ミガキ後スタンプ文施文せず 被熱(一部橙色化)・煤付着	6-10
17	瓦質土器	火鉢類	—	[5.9]	(22.0)	CDGI	10	普通	にぶい褐	B2グリッド	底部ハナナデか 内外面黒化	
18	瓦質土器	焜が	(16.6)	[10.1]	—	CDGI	15	良好	明赤褐色	C2グリッド	口脛部・外面ミガキ・スタンプ施文 内面煤付着	6-11
19	瓦質土器	仕切盤	長さ [12.9]	幅 [7.3]	器高 [4.4]	CDI	5	普通	明赤褐色	C2グリッド	底部シワ状底 土板上に巻貝が設置されている 被熱(橙色化)・煤付着	6-12
20	平瓦	—	長さ [9.0]	幅 [11.0]	厚さ 1. 9	DI	—	良好	浅黄橙	表探	左端部二次的に加工(裁打痕) 凸面ナデ 四面弱く銀化 被熱か(酸化)	6-13



第16図 近世以降の出土遺物（1）



第17図 近世以降の出土遺物（2）

V 調査のまとめ

1 第1号溝跡の時期について

第1号溝跡は直線的な溝跡で、出土遺物から古墳時代後期に掘削され、奈良時代にかけて埋没したと推定された。問題は、古墳群内に位置するこの溝跡が古墳の一部であるのか否かである。まず、出土土器の時期から検討したい。

第1号溝跡からは土師器長胴甕（第9図3・4）と小型長胴甕（5）、小型甕（13）が出土した。第9図3の長胴甕は細身で胴部中央付近がやや膨らむ。口径よりも胴部最大径が僅かに小さい。器高は40.4cmと最も長胴化が進行した段階である。長胴甕（4）は最大径が口縁部にある。胴部上位にやや膨らみを持ち、底部にかけて窄まる。

周辺遺跡で長胴化した甕の類例と伴出遺物、特に須恵器坏Hが出土した遺跡を参考に時期の検討を行うと、まず東松山市舞台遺跡B-15号住居址がある（第18図43～47）。46・47の土師器甕の器高は約40cmで胴部はやや膨らみをもつ。器高の高い比企型坏が伴う（43・44）。比企型坏を分析した水口由紀子の、3段階第2小期（7世紀初頭）に位置付けられよう（水口1989）。ほぼ同時期のB-13号住居址からは段のしっかりした有段口縁坏が出土しており、6世紀末葉～7世紀初頭頃と推定される。

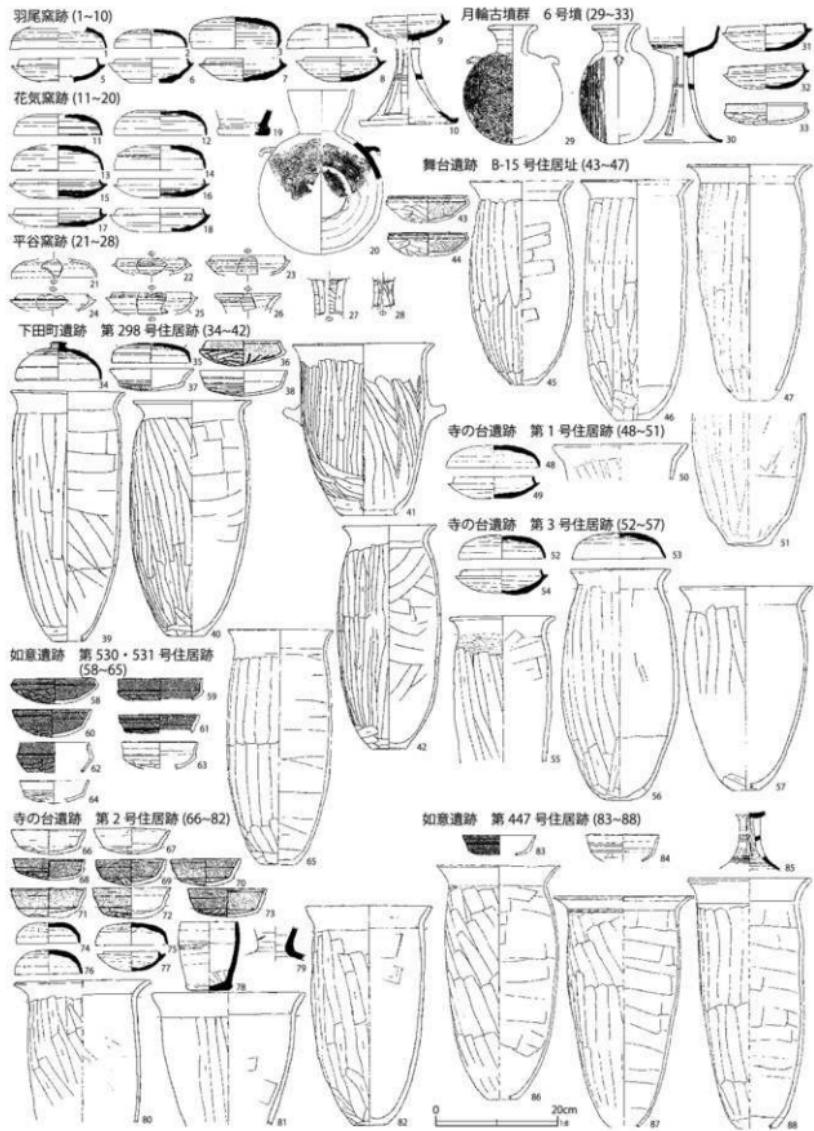
滑川町月輪古墳群6号墳（29～33）から出土した比企型坏は大振り・扁平で（33）、舞台遺跡と同一段階に比定されている。伴出する須恵器高坏（30）は五厘沼窯跡群と推定されている（月輪遺跡群発掘調査会2008）。31の坏H身は口径12.9cm、器高は4.5cmで、生焼けとの表現から在地産の可能性があるか。羽尾窯跡のそれと比較してやや器高が高い。32は南比企産で、口径12.1cmと、31よりも小さい。提瓶（29）は搬入品で、把手は鉤状である。概ね6世紀末～7世紀初頭に位置付けられよう。

熊谷市下田町遺跡第298号住居跡（34～42）からは40.4cmと本遺跡例と同一器高の長甕が出土した（39）。甕の胴部はやや膨らみが強く、最大径は胴部にある。須恵器坏H蓋（35）は口径13.0cm、やや扁平で、口縁部と天井部との境に沈線を持つ。TK209併行と思われる。伴出する有段口縁坏（38）・坏身模倣坏（36）は大振りで6世紀後半～末葉と思われる。

深谷市如意遺跡第530・531号住居跡（58～65）は、土師器長胴甕の器高は38.1cmで、胴部最大径が口径よりも僅かに大きい（65）。坏は有段口縁坏（口径12.8cm）、坏身模倣坏（口径12.8cm）がある。坏身模倣坏は口縁部が短く内傾する。6世紀末～7世紀初頭頃のものであろう。

滑川町寺ノ台遺跡第1号住居跡（48～51）・3号住居跡（52～57）は2軒が重複するがほぼ同時期と思われる。土師器長胴甕は最大径を胴部中央に持つやや古相のもの（56：器高37.5cm）と、最大径が口縁部にあり胴部が寸胴状に直線的に延びるもの（55）がある。本遺跡例と比較すると、胴部の膨らみが強いものが主体である点でやや古い様相が認められる。57の位置づけは不明確である。

須恵器坏H蓋と坏H身は滑川町五厘沼（羽尾）窯跡群と考えられている（酒井1989）。坏H身は口径約13cm、蓋は口径にばらつきがあるが、口縁部と天井部との境に沈線はない。五厘沼窯跡群には羽尾窯跡（1～10）の他に花気窯跡（11～20）、平谷窯跡（21～28）も近接し、同一窯跡群と捉えられる。蓋の口縁部と天井部との境に沈線を持つものが主体となる滑川町羽尾窯跡が古く、口縁部境の沈線が消滅するものが主体となる花気窯跡と平谷窯跡が時期的に新しい。詳論は省くが、羽尾窯跡→花気窯跡→平谷窯跡の順に築窯されたと考えられる。須恵器専焼窯として出発し



第18図 参考資料

た五厘沼窯跡群は平谷窯跡の段階で瓦陶兼業窯に転換し、寺谷廃寺の創建に関わったと理解されている（酒井2011）。酒井によれば、羽尾窯跡がTK209型式で7世紀初頭、平谷窯跡が620～630年代の操業と想定された。花気窯は平谷窯にやや先行する段階となろう。寺ノ台遺跡第1・3号住居跡の坏H蓋は沈線が消失しており、羽尾窯跡に後出する。坏身の器高が高く、坏蓋の口径が大きいものが含まれ、花気窯よりもやや古い様相も窺えるが、花気窯と概ね平行する段階と考えておきたい。

寺ノ台遺跡第2号住居跡（66～82）の長胴甕は最大径が口縁部にあり、小型長胴甕（第9図5）に類似した砲弾型の甕（器高36.0cm）（82）や第9図4によく似た甕（80）、胴部に膨らみを持つものがあり、本遺跡例とほぼ同時期と思われる。土師器坏は比企型坏（口径11.8cm）、有段口縁坏（口径11.6～12.8cm）がある。比企型坏・有段口縁坏共にやや小型化している。

2 第1号溝跡の性格について

前節の検討により、第1号溝跡は7世紀2/4期～中葉に掘削されたと推定した。直線溝で、埴輪は伴わない特徴がある。埼玉古墳群ではTK43段階をもって埴輪樹立が停止し、須恵質埴輪壺の存在からTK209型式古段階の中の山古墳をもって前方後円墳が消滅したとされている（関2018）。おそらく7世紀初頭頃には埴輪も前方後円墳も消滅したと考えられ、埴輪が伴ないことを根拠に古墳ではないとは言えない。また、前方後円墳も消滅した段階であるため、古墳であるとすれば円墳ではなく方墳の可能性を想定する必要がある。

周溝から長甕が出土する古墳

第1号溝跡からは土師器長甕と小型甕、焼土塊がまとまって投棄されたような状態で出土した。古墳の供獻用土器には土師器坏・壺・高坏類や須恵器が用いられ、土師器甕は使用されることはないようである。

土師器長甕を周溝に埋置（出土）した古墳は、

須恵器は坏H身（口径9.0cm）、坏H蓋3点（口径10.4、11.0、11.9cm）があり、五厘沼窯跡群産である（藤野2011）。須恵器坏Hは平谷窯跡よりも小振りで明らかに一段階新しい。須恵器坏G、土師器北武藏型坏は伴出せず、出現前の段階と思われる。平谷窯跡に後出する7世紀2/4期後半～中葉と考えられる。

如意遺跡第447号住居跡（83～88）の土師器長甕（86～88）は器高40cm前後で口縁部に最大径がある。86は本遺跡出土甕に似て、胴部上位に膨らみを持っている。87は口縁部が「く」の字に強く折れ、薄い器壁で胴部は砲弾形に窄まる。砲弾形の器形は新出の様相である。須恵器長脚2段2方（？）高坏がある。土師器坏では口径12cm前後の小振りの有段口縁坏破片を含む。北武藏型坏が含まれないことから、7世紀前半（2/4期）～中葉頃の所産と考えておきたい。本遺跡第1号溝跡出土の甕は概ね同時期かやや古い段階と思われる。

滑川町屋田6号墳（円墳）周溝から長胴甕2個体と壺が出土した。長甕の1つは底部穿孔されていた。5世紀末～6世紀初頭頃であろう。屋田遺跡に隣接する滑川町月輪古墳群54号墳（円墳）から土師器長甕が周溝底から横倒しに置かれた状態で出土した。6世紀初頭である。月輪古墳群38号墳（円墳）からは周溝覆土上層から横倒しの土師器長甕が出土した。6世紀初頭に比定されている（月輪古墳群発掘調査会2008）。熊谷市青山の大境南古墳群2号墳は全長31mの前方後円墳で、周溝内から底部穿孔された土師器壺が出土した。土師器長甕破片も出土しているが、周溝内出土か否かは不明である（註1）。埴輪を持たないため7世紀初頭の築造と考えられている（熊谷市2015）。

周溝から長甕が出土する例は鴻巣市新屋敷遺跡D区60・63・65号墳でも確認できる。時期的に5世紀後葉～6世紀前半で本遺跡例よりも古い。60号墳では多量の煤が付着した甕が破碎された状態

で出土している。

周溝底面を整地する古墳

第1号溝跡は最下層が整地土の可能性がある。古墳の周溝底面を整地する例としては滑川町月輪古墳群55号墳がある。これは6世紀初頭に築造された帆立貝式前方後円墳で、周溝最下層が人為的に埋め戻されていた。底面を均すために整地されたと考えられている。月輪古墳群では調査された59基の古墳中、39基の古墳に同様な人為的な堆積（整地）土が認められた。また、東松山市下松5号墳（東松山市遺跡調査会2004）、鴻巣市新屋敷D区でも同様な整地土の堆積が確認されており、第1号溝跡の堆積状況は古墳にも共通すると考えることができる。

溝中土壌を持つ古墳

第1号溝跡には2基の土壌（第6・7号土壌）が掘り込まれていた。土層観察から最下層の堆積土を切り込んでおり、規模・形態などから第1号溝跡に伴う「溝中土壌」と考えられた。覆土上層は第1号溝跡堆積土に覆われており、溝掘削直後か、あまり時間的に隔たらずに造られ、奈良時代には埋没したことが判明している。

後期古墳の周溝に掘り込まれた埋葬施設としての「溝中土壌」の類例は検索できなかった。熊谷市箕輪の東山古墳群1号墳（全長45.44mの帆立貝式前方後円墳）と、熊谷市青山の阿諱訪野遺跡1号墳（円墳）から「溝中土壌」が検出された。前者は7世紀初頭～前半である（大里村教育委員会）。

註1 熊谷市教育委員会のご厚意で実見させていただいた。土師器壺は弱い稜があり、胴部は壺としてはやや長胴化しており、新しい様相がある。土師器長壺は口縁部が強く横に折れ、胴部は上半に膨らみを持つ。周溝から出土したか否か確認できなかった。

引用・参考文献

大里村教育委員会 1997『大里村南部遺跡群Ⅰ』

小川町 1999『小川町の歴史 資料編Ⅰ 考古』

川本町教育委員会 2005『鹿島73号古墳 鹿島古墳群初の方墳』川本町発掘調査報告書第12集

江南町教育委員会 1989『塩西遺跡Ⅱ』江南町文化財調査報告9

江南町 1995『江南町史資料編Ⅰ考古』

江南町教育委員会 1988『本田・東台・上南原』

江南町教育委員会 1998『千代遺跡群－弥生・古墳時代編－』

会1997）。いずれも埋葬施設か否か不明である。

まとめ

第1号溝跡が古墳の周溝であるとの証拠は得られなかった。もし、古墳であるとすれば方墳となる。方墳の類例は少ないが、北4kmに位置する深谷市鹿島古墳群から2基（川本町教育委員会2005）、小川町穴八幡古墳（小川町1999）が確認されている。いずれも7世紀代の終末期古墳と考えられ、前者では周溝は不明確であるが、穴八幡古墳では二重の周溝が巡る。

第1号溝跡の東側には対応する周溝はないので、方墳であれば西側に展開する筈だが、西側にも墳丘の痕跡は見られず、石室を構成したであろう凝灰岩等の石材も検出されなかった。また、第6・7号土壌についても埋葬施設か否か不明である。土師器壺を周溝に埋置する例はいくつかの古墳で確認できたが、確実に7世紀に降る例は抽出できない。溝の最下層を整地する行為は古墳と共にすることは確認できた。

現状では第1号溝跡の性格は不明とせざるを得ないが、周間に集落や住居跡はなく、煮炊用具である土師器長壺が焼土を伴う形で投棄されており、「黄泉戸喰」に類した埋葬儀礼や祭祀行為が第1号溝跡の周囲で執り行われた可能性はある。また、日高慎の述べるような葬送儀礼や首長権継承の場としての区画溝を伴う「方形区画施設」（日高2021）も念頭に置く必要があろう。今後の周辺地域の調査例を待ちたい。

- 駒澤大学考古学研究室・滑川町教育委員会 2011『寺谷廃寺・平谷窯跡I』
- 埼玉県教育委員会 1980『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984『雇田・寺ノ台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992『蟹沢・芳沼入・芳沼下入・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『大野田西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001『大木前・小栗北・小栗・日向』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第259集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002『谷ツ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第282集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2006『下田町遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第319集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2009『古里古墳群駒込支群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第363集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2021『油面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第470集
- 埼玉県立歴史資料館 1987『埼玉の古代窯業調査報告書』
- 酒井清治1989『古墳時代の須恵器生産の開始と展開－埼玉を中心に－』『研究紀要』第11号 埼玉県立歴史資料館
- 酒井清治2011「5-2 寺谷廃寺・平谷窯跡出土の瓦と須恵器について』『寺谷廃寺・平谷窯跡I』
- 塙野 博 2004『埼玉の古墳』さきたま出版会
- 滑川町月輪遺跡群発掘調査会 2008『月輪遺跡群』
- 関 義則 2018『埼玉古墳群の学術的評価と歴史的意義』『史跡埼玉古墳群総括報告書I』埼玉県教育委員会
- 滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会 1997『滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群』
- 東松山市遺跡調査会 2004『上松本遺跡(第2次)』埼玉県東松山市文化財調査報告書第2集
- 日高 慎 2021『古墳時代の葬送儀礼』『古墳時代のマジカルワールド』松戸市立博物館
- 藤野一之 2011「5-1 瓦・須恵器の胎土について』『寺谷廃寺・平谷窯跡I』
- 水口由紀子 1989『いわゆる比企型坏の再検討』『東京考古』7
- 村上伸二 1999『嵐山町将军沢窯跡第1支群A地点の調査』『第32回遺跡発掘調査報告会発表要旨』大正考古学会
- 寄居町遺跡調査会 2014『前塙田遺跡』寄居町遺跡調査会報告第37集
- 嵐山町 1983『嵐山町史』
- 嵐山町 1997『戦い・祈り・人々の暮らし－嵐山町の中世－』嵐山町博物誌第5巻・中世編
- 嵐山町 2003『丘陵人の叙事詩 嵐山町の原始・古代』嵐山町博物誌第4巻
- 嵐山町遺跡調査会 1987『神山遺跡』嵐山町遺跡調査会報告1
- 嵐山町遺跡調査会 1987『古里古墳群 北田遺跡・土上橋支群・駒込支群の発掘調査』嵐山町遺跡調査会報告2
- 嵐山町遺跡調査会 1988『行司免遺跡－本文編－』嵐山町調査会報告4
- 嵐山町遺跡調査会 1988『行司免遺跡－遺物図版編－』嵐山町遺跡調査会報告5
- 嵐山町遺跡調査会 1995『六丁遺跡』嵐山町遺跡調査会報告7
- 嵐山町遺跡調査会 1998『西ノ谷遺跡』嵐山町遺跡調査会報告8
- 嵐山町遺跡調査会 2000『金平遺跡II』嵐山町遺跡調査会報告9
- 嵐山町教育委員会 1980『金平遺跡』
- 嵐山町教育委員会 1991『町内遺跡I 行司免遺跡(2次)・篠新田遺跡の発掘調査』嵐山町遺跡埋蔵文化財調査報告4
- 嵐山町教育委員会 1999『町内遺跡III 金平遺跡発掘調査報告書第3・第4・第5地点』嵐山町埋蔵文化財調査報告7
- 嵐山町教育委員会 2001『嵐山町比丘尼山廃寺の発掘調査』嵐山町博物誌調査報告第6集
- 嵐山町教育委員会 2001『屋田古墳群ガスステーション建設事業に伴う発掘調査報告書』嵐山町遺跡調査報告10
- 立正大学考古学研究会 2002『第四紀』平成14年度活動報告
- 渡辺 一 2002『古代の丘陵開発とその世界－『続風土記の世界－』』『あらかわ』第5号 あらかわ考古談話会